

## 初代細田善兵衛伝

岡崎 敬雄著 『細田一雲翁小伝』

二代目細田善兵衛著 『一雲翁伝記補遺』

仲 村 研 編

ま え が き

ここに紹介する史料は岡崎敬雄著『細田一雲翁小伝』(明治四十五年刊)と二代目細田善兵衛の肉筆による『一雲翁伝記補遺』の二篇である。岡崎敬雄は滋賀県蒲生郡北比都佐村(現日野町)の出身で初代細田善兵衛の妻みつ子の実母ぬい子(徳谷村岡崎敬長三女)の従弟にあたり、初代善兵衛と知己の間柄にある人物であった。明治三十八年に初代善兵衛が死去し、七回忌にあたる明

治四十五年に刊行されたのが活版『細田一雲翁小伝』である。この伝記は初代善兵衛を顕彰する意図がこめられており、近江商人細田善兵衛がいかにか克己して、京都有数の半襟商人となりえたかを素描したものである。

これにたいして『一雲翁伝記補遺』は、二代目細田善兵衛によって記されたもので、意図するところを「緒言」の中で次のように述べている。

我祖先の遺された家訓、歩んで来られた行跡を直接に伝へ、その遺徳遺業の御蔭によつて私共子孫が斯

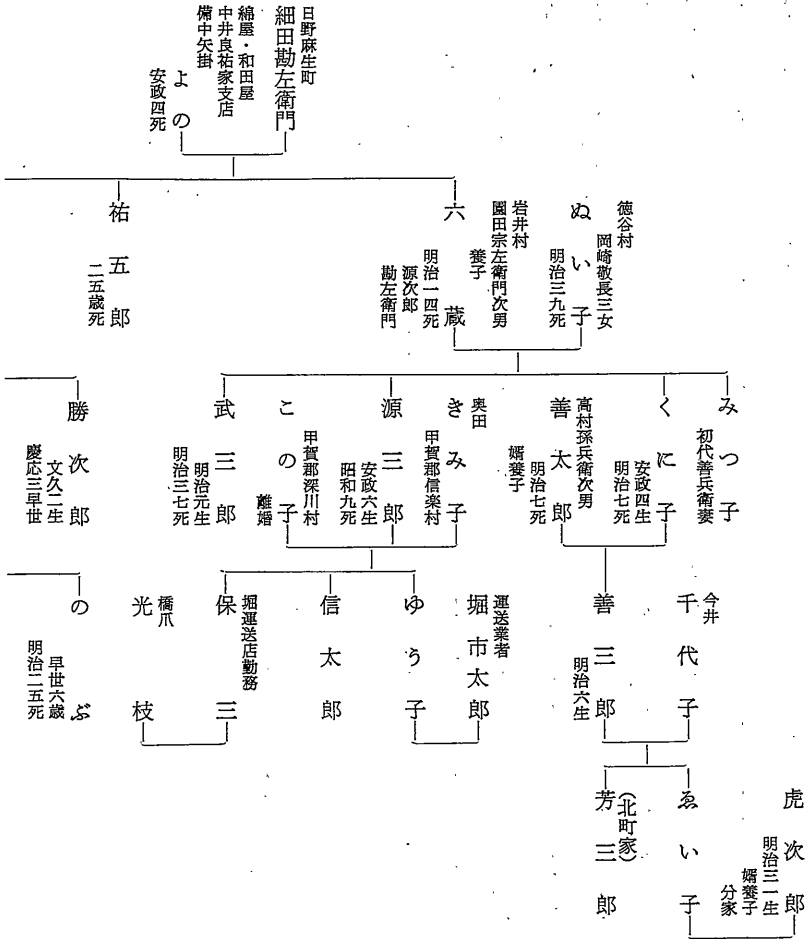
くも安穩に生活してゆけます事を実物教訓によつて示した方がより効果的であらうと考へましたので、茲に思ひ出づるまゝの記憶を辿りて、先考の生涯中や、目星い事実を拾つて記述することにしました。その上折にふれて書かれた家訓詠まれた和歌を録し新聞や書物に登載された関係記事を転載し、最後に一代の年表を付記し別に先妣美津子刀自の事どもを加へて兎も角も一纏として見ました。私は元來拙筆の上、近來老衰から手指震ひ字格乱れて甚見苦しき書体でありますが、近親のみに頒つものには印刷より手記の方が親しみの意義が深からうと思ひ、老後の閑つゞしといつた形で執筆し、この小冊を書遣すことゝなつた次第であります。

時に昭和十六年夏で二代目善兵衛、細田一善数え年七十五歳であつた。この『補遺』は「養子を迎ふ」からはじまる四十数項目の見出しを付して、平易な文章で淡淡と記述しており、末尾に新聞などに紹介された初代善兵

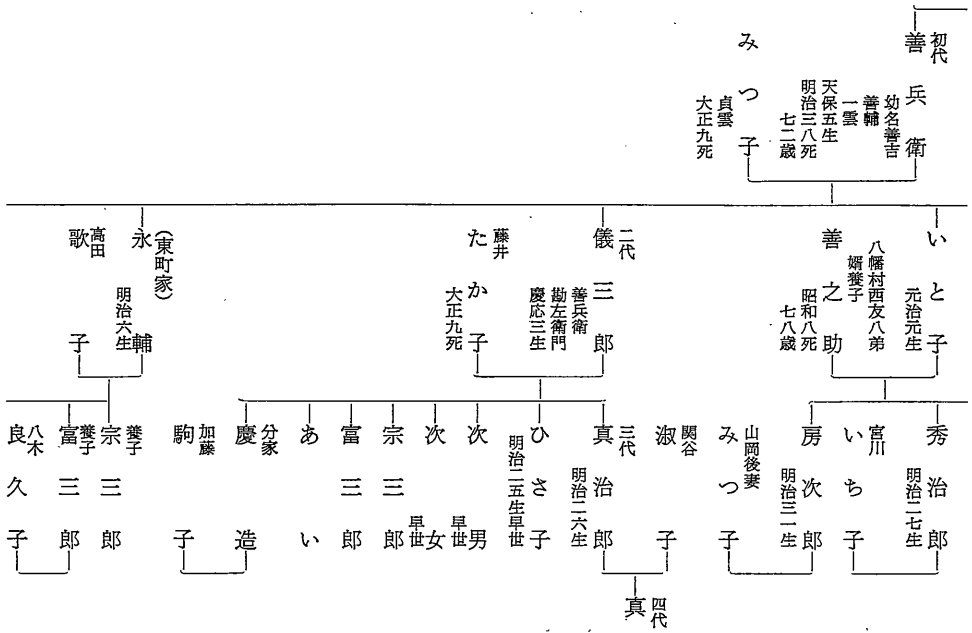
衛や細田合名会社、細田株式会社にかんする記事と、二代目の実弟永輔の思い出を収録している。

私は昨秋、同志社大学人文科学研究所の第七回公開講演会において「京都商人の『家』の二類型」と題し、半襟商細田善兵衛家の家族形態と相続のあり方と経営との関係について言及した（要旨は昭和五十五年十一月二十日「京都新聞」朝刊に掲載）。また同志社大学人文科学研究所編『共同日本の家』（国書刊行会刊）に私は「商人の家」と題する一篇を投じているが、そこで細田家の半襟業経営の歴史を、ここに紹介する初代細田善兵衛の伝記を軸に、細田株式会社の社内報『襟』からの記事を肉付けして論じ、細田家の経営と相続との関係を詳述した。その中で細田家の略系図を掲げておいたが、それは『一雲翁伝記補遺』の記事から作成したものであつた。左に紹介するのがそれである。その後、細田家に二代目善兵衛が作成した系図のあることを知らされたが、詳細は未見であるのでいまは『補遺』からの略系図の紹介にとどめておきたい。

(昭和初年まで)

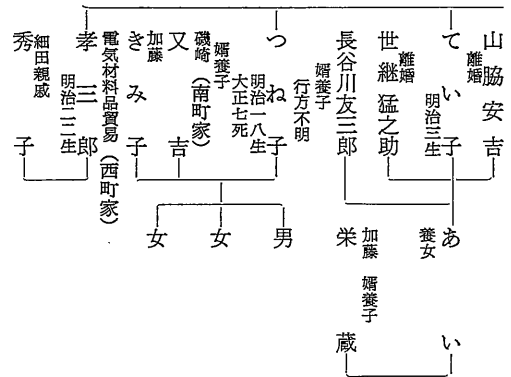


細田善兵衛家略系図



也

細田家は略系図にみえる家族のほとんどを細田株式会社  
 社の経営に投入し関係せしめた。江戸時代から戦前の伝  
 統的な京都商人の多くが、商業経営や相続にかんして、  
 実子があっても分家させず他家へ奉公に出して、そこか  
 ら別家に出し、相続人は有能な奉公人をもってあてると  
 という形態をとったのと全く対照的に、血縁直系を中核と  
 して周囲に分家や血縁者を配し、その外縁に商店から輩  
 出した別家群を配置するという経営形態をとっている。



このような細田同族の経営にたいする関係のあり方は、  
 財閥のそれに類似している。ただし、財閥の場合はその  
 経営は広範囲であり、その多様性に応ずる同族の配置と  
 いうことになるが、細田家の場合は、半襟業単一であ  
 り、この点では財閥家族と異なるものがある。  
 さて『補遺』から引き出せる点は種々あるが、細田家  
 の商業経営がいつ確立するかということである。その年  
 代を推測するひとつの手掛りは、細田家でいつ家訓が成

文化されたということである。『補遺』は初代善兵衛の遺稿として「明治十二年頃の選定せられるもの」とする掟五か条を記述している。また同じ遺稿として、明治十六年一月、初代が五十歳のときに記した「自伝に叙する教」（善兵衛の行商している姿を画いた掛軸の裏面に記されている）の中の三か条の家訓（店訓）をも掲載しているが、これから判断すると、細田商店の基礎は初代が五十歳になる明治十五年前後に確立したとしてよい。なぜなら家訓・店訓は経営者が困苦ののち、克ち取った自己の体験を教訓として家族や子孫・店員のために成文化するのが常であるから、成文化された掟の成立時点が経営の確立、安定した時点としていいのである。このことは「一雲翁貞雲嬭年表」からも合点されるところである。

初代没後、二代目、三代目と移行する細田株式会社を経営の展開は社内報『襟』によるほかはない。『襟』は大正十五年一月に細田合名会社の『店内月報』として創

刊され、同年六月に『襟』と改題され、発行所も昭和二年一月に細田合名会社から細田株式会社に変わり、昭和十七年十月まで二〇二号を数えている。半襟業界の動向、会社の収支決算、店員の人事、細田一族・店員家族の慶弔、他商店の経営方針、精神訓話など、記事は多方面にわたり、戦前までの京都商人の活動が手にとるように知られる貴重なものである。『襟』は大部なためここに紹介するのは困難であるが、細田家の経営を見るうえではここに紹介する二点の史料に加えて必見の史料である。

史料「初代細田善兵衛伝」を本誌で紹介するにあたり、細田家四代目の当主細田真也氏には大変なご無理を承知していただき、収録のお許しをいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

なおここに紹介する二点の史料は、原則として原文どおりとし、旧仮名はそのままとしたが、一部当用漢字を使用し、句読点を補ったことを断っておきたい。

## 細田一雲翁小伝

岡崎敬雄稿

身を布衣に起し、一代にして克く巨万の富を贏ち、晩年は専ら神を敬し仏に賽し、好んで風流韻事に風懷を遣り、又子弟眷族の薰陶に励め、蒲柳の質を以つて能く七十有二の高齡に及ぶ迄、勤勉努力勇往邁進、終始渝らざりし畏友一雲細田善輔翁の如きは、真に我が商界の一人、実業家の好典型と謂ひつべし。茲に聊か其一生の経歴性行の主なるものを繹ね、以つて記述する処あらんとす。

翁は細田勘左衛門氏の二男、天保五甲午年三月二十日を以つて近江国蒲生郡日野麻生町に生る。幼名を善吉と言ひ、後に善兵衛と改め、老後退隱するに及びて更に善輔と改名し、又一雲と号せり。翁は実に我国の商人中最も

勤勉に最も耐忍強き近江商人の賦性を備へたるなり。宜なるかな、その比儔なき耐忍と勤勉とを以つて、よく巨万の富を作り得たる事や。翁の家は代々綿商を営み、家号を綿屋若くは和田屋と称し、連綿として殷盛を極めしが、月に叢雲花の嵐の譬に洩れず、翁の父勘左衛門氏の代に至り、家運漸く振はずなりぬ。然るに、翁の父は頗る剛直廉潔の人にして毫も屈撓の色なく、如何にもして細田家を再興せんとし日夜心を悩ませり。茲に日野町の豪商に中井良祐といへる人あり、夙に勘左衛門氏の清廉実直を知りて之を信頼し、特に推薦して備中国御調郡尾道町なる中井家支店の主宰とし店務の刷新を図らしめたるに、果して著しき功績あり。其後同店を辞し、新に同

国小田郡矢掛町に支店を創めて質屋業を営みしに、望月の盈つれば虧くる世の習、復もや暗澹たる妖雲は薄幸なる細田家を襲ひぬ。曩に勘左衛門氏が旧主中井家の支店を辞せし後は、家事を長男祐五郎氏に託したりしに、心短き春の山風は無惨にも花の盛りを泥に委し、祐五郎氏は二十五歳を一期として亡き人の数に入りぬ。されど、翁の父は既に老衰し、家を承くべき翁は猶幼冲にして、一家経営の衝に当たるもの無かりしかば、已むを得ず同国蒲生郡岩井村園田宗左衛門氏の二男六蔵氏を迎へて養嗣子と為し、同郡徳谷村岡崎信兵衛氏の次女ぬい子を配として営業を継続せしめたり。後細田家は復もや運命の手に翻弄せられ、翁が十六歳の時、父勘左衛門氏遂に病歿せられぬるぞ是非も莫き。如露亦如電、脆きは人の命なるかな。翁の義兄六蔵氏は資性温厚篤実にして、唯真面目と熱心とを以つて日夜細田家の再興に努めしかども、家運拙くして容易に恢復する事能はず、世人の信用と同情とは益加はるに拘らず、不幸災害駢び臻り、家計

日一日に不如意勝となり、前途頗る寒心すべき様なりしかば、義兄弟は凝議懇談すらく、亡父の甥にして、神崎郡大塚村に住し麻布太物類の行商を営める高村孫兵衛氏は、実に業務に忠実熱誠にして郷党の模範とする所なれば、実務修業のために暫く師事して商法の秘訣を了得すこそ能からぬ。且亡父の遺言中にも此事ありければとて、乃ち安政元年十二月、翁が二十一歳の時、一先づ高村氏方に寄食するの身となれり。古句に曰く「子子や蚊になるまでの浮沈み」と。翁は幼にして父に別れ家を離れ、荆棘前に横はり狂瀾後に迫り、汚泥に漂ふ子子が蚊になるまでの浮き沈みよりも更に甚しき苦楚艱難を嘗め尽くされしなり。されど、嚴冬を経ざれば春に遭はず、攻かれて始めて壁も光を發すべし。翁が高村家に身を寄せたる翌年正月、即ちその二十二歳の春なりき、慈愛に富める高村氏は翁に資金として金拾両を授与し、さて懇諭せらるるやう、細田家は代々耐忍と正直とを以つて世の信用を博したりし家柄なれ



ば、之を再興すべき任に当れる汝の覚悟は亦異常のものあるを要す、それ男子の一旦商業に志すや、風に梳り雨に沐し、薪に臥し胆を嘗め、有らゆる艱難を忍びて奮進せざるべからずと、深切面に顯れければ、聡明剛毅の翁は目のあたり亡父の訓誡を聞く心地し、蹶然起つて尾濃勢の各州に小間物の行商を拵められぬ。

翁は元来蒲柳の質なれば、屢々風雨を冒す行商はその耐ふる処にあらざりしかど、翁は聊も屈する色なく、「陽気発処金石亦透、精神一到何事不成」とは、その常に口癖の如く唱へられたる所なりき。古歌にも「為せば成り為さねば成らず何事も成らぬは人の為さぬなりけり」と云へり。事の成らざるは其人の為さざるなり、精神一到何事か成らざるあらんや。翁のよく此理を弁へ、匪勉強力怠る事なかりしは、亦壯んなりと謂はざるべからず。実に翁は此志を以て行商を拵められたり、その成功は素より期して俟つべきのみ。後、小間物は余りに重ければとて、改めて半襟を鬻ぎ、濃尾勢江の間を遍歴し、一日

優に十里の道を、而も十貫目以上の荷物を天秤棒もて肩に荷ひつつ、数年一日の如く奮闘し、適れ成功の人とはなられしには、強からぬ身をもてよく斯く迄に力めたるものかなと、歎賞せざるものなかりき。

翁は戊申詔書の御下賜に先だちて既に業に其の御趣旨を完全に奉体実行したりき。実にや、炎熱砂を燉く夏の日も厳寒指を墜す冬の夜も、翁は半日片時たりとも其業を休みたる事なく、人の憩ふ時も已他人の失ひし時間を償はんとて一層奮励したりと云ふ。又行き暮れて宿を求めんとするに際し、格外に宿料を貪る旅館と見れば、徹宵歩を進め、安直にして正直親切なる旅宿まで到り著きて寝ぬる事と定め、尚旅中は草鞋紙筆の購入に至るまで意を注ぎ、安価なるものを見れば予備品を多く買ひ求め、決して不廉なるものを買入れて損失を見るが如き愚を為さず。途中にて草鞋の片足破るれば、其損じたる方のみを穿換へて猶数里を行きたりと云ふ。一見吝嗇に似たれど、此心掛ありてこそ他日よく殷富の豪商とも為り得た

るなれ。鎧鉢と雖も之を積まば埃億の金額ともなりぬべし。翁は毎に此所に注意せられ、他人の心付かぬ点に於て隠れたる利益を獲得せられたりしなり。或は又、落花の雪に踏み迷ひ、木の下蔭を宿となし、野もせに集く虫の音を友として晷を待ちにし事も幾十度なりけん。茶屋に憩へば時間と金との浪費ありとて全くこれを廢し、疲るれば並木の陰に草を茵として腰を下し、袂を払ふ涼風に玉なす汗を拭ひつつ、肘を枕に旅衣片敷きて暫し無何の郷に遊ぶを無上の樂みとす。かくして、稍しく旅の疲を慰むれば再び起き上りて行商を続け、按摩按摩は我手に為し、決して他人を煩はさざりきと云ふ。

孝経に曰はずや「身を立て道を行ひ名を後世に挙げて以つて父母を顯すは孝の終なり」と。翁は実此の教を大悟し、その家を再興せんの一念凝つて鉄の如く、一意全力を商務に傾倒せられたるなり。されば、翁の熱誠は臆て世人の認むる処となり、顧客の信用益々加はりたれば、此機を逸せずして業務の一大拡張を計らんとし、安

政五年四月、二十五歳の時、高村家を辭して郷里日野に歸り、義兄六藏氏と協力し、愈獨立して大々の飛躍を試みんとせり。六藏氏は乃ちその経営せる備中国小田郡矢掛町の支店を閉鎖し、日野町に引揚げて専ら翁を補弼せり。後翁は六藏氏の長女みつ子と結婚し、琴瑟相和して俱に与に一家の再興に生死せん事を誓ひ、一家の基金堅く、眷族の結合愈密なり。翁は猶半襟地の行商に従事しつつ、夫妻鬪族相憑り相幫けて業務に励精し、寢食を忘れて拮据勉したりしかば、漸くにして相當の貯蓄を贏すに至りぬ。六藏氏も翁が此熱誠と勉強とには常に感嘆して措かざりといふ。茲に於て、翁は今や花々しく京都に出で、一層事業を拡張し家運を振興すべきの時到来りとし、家族と協議の上遂に出京する事に決し、乃ち高村孫兵衛氏の二男善太郎氏を迎へて義兄六藏氏の二女くに子の夫婦とし、之に日野町なる細田商店の経営を嘱し、翁夫婦は相携へて慶応二年丙寅十月京都に移住し、新に友禪の呉服商を創め、屋号は郷里日野町に因みて日野屋

と号し、此処にても、翁一流の熱誠と正直と深切と堅実とを以つて、孜々汲々営業に従事したりしかば、令聞忽ち遠近に轟き、華客店頭に雲集し、家運頓に殷昌を極めたり。

「年の瀬や水の流も人の身も」二十余年慘憺たる辛酸の効漸く現はれ、宿昔の志纔に遂げられんとし、令名嘖々商運隆々、滿帆に順風を孕み成功の彼岸に向ひて駛走する折しも、妖雲漠々としてあらはれ狂瀾澎湃として起り、一朝にして失意奈落の底に沈淪するに到れるぞ是非も莫き。明治七八年の交なりき、顧客の一人、翁が熱誠勤勉に深く信頼し、囑して藍染業を創めしめたり。然れども、翁は本業の経営に忙がはしく日も是れ足らざる有様なれば、或者を雇傭して之を担任せしめたり。かくて数年を経る程に、意外の失敗を醸し数千円の損失を招きたれば、為に翁は殆ど家産を盡し、到底本業をも継続する事能はざるに到りぬ。これ実に明治九年の事にして、翁が四十二の厄年に当れり。噫、二十余星霜の辛苦

一朝にして水泡に帰し、纔に成らんとせる宿昔の志忽にして折け、さしもの翁も呆然として意氣殆ど喪失し、我が運命も今は限りぞと、一旦は店を鎖し家を畳み郷里に帰らんとまで決心せり。その心中や如何なりけん。夫れ盤根錯節に会はざれば器の利鈍を知るべからず、厄窮に処せざれば人物の真を見る可からず。翁が不撓の負けじ魂は、此の困窮の極に際して益々その真髓を發揮し来りぬ。翁は更に謂へらく、かく失敗落魄して、何の面目あつて歸りて郷人に接せんや、疇昔僅に十金を資とし天秤棒を肩にして行商せし事を思へば、今にして再起を計らんは寧ろ易々たるのみと。乃ち心機を一転して専心家運の挽回を画し、番頭手代数人を尽く解雇し、唯数名の丁稚のみを使役する事とし、商品を風呂敷に包み自ら之を背負ひて得意先を廻りつつ、夜は呉服物の意匠図案の工夫に思を凝し、夙夜励精したりければ、顧客の同情と信用とは益々加はり、数年にして能く恢復の功を奏するを得たり。

嗚呼、陽氣の発する処金石も何ぞ透らざらん、宿志遂に成りて家道振興の望は完全に遂げられぬ。明治十七年には東京に半襟の問屋を開業し、長女いと子の婿養子善之助氏をして経営の衝に当らしめ、同十九年五月には、更に同地に一支店をさへ設くるの盛況を呈せり。後、女婿善之助氏は別に独立して商業を営まんとし、明治二十四年東京の支店を引退する事となり、翁も亦同年を以つて隠退し、家を長子儀三郎氏に譲りて善兵衛の名義を襲がしめたり。翁は尚同家の基礎を永久に堅うせんことを期し、二男永輔、女婿又吉、三男孝三郎、甥善三郎の五名をして共同して日野屋の營業を經營せしむる事に定めたり。これ洵に万全の策、翁の注意周到なりと云ふべし。

爾後、翁は専ら神仏を信崇し後世を希ひ、わけて仏学はその頗る熱心に研鑽せられたる処なりき。翁は又国学歌道に心を潜め、和歌俳句を楽しみとし、詠吟数百句に及び、悠々自適一世を達観し、大悟得度の三昧境に入られ、明治三十八年、七十二歳を一期とし、従容として黄

泉の客となりぬ。思へ、翁が所有辛酸苦楚を嘗めて連れ細田家を再興し、功成り望遂げて後は、信仰と趣味との裡に自適しつつ、人生の定命を過ぐる二十有余星霜を経て帰るが如く逝かれしは、一に半生に於ける比類なき勤勉力行の賜ならずや。翁の逝ける後、遺族はよくその訓誠を遵奉し、益々業務に励精し、且質素を守り、又使用人の薰陶教育に勤めたれば愈発展隆昌の運に向ひ、明治四十三年五月には、族人五名を以つて合名会社を組織し、京都本店の外、東京大阪に支店を置き、横浜名古屋に出張店を設け、之等の店員殆ど百名に達し、分家五、別宅十余を数ふるに至れり。

明治四十四年、近江国八幡町商業学校二十五年の記念事業として『近江商人』と名づくる冊子を刊行し、近江商人にして成功したる者の小伝を輯録するに当り、翁も亦その中に加へられ、又、往年、京都日出新聞、大阪毎日新聞、東京中外商業新報、其他の諸新聞が成功せる実業家の言行録を連載したる時も、一として翁の性行及び履

歴を掲げざるなかりしを見るも、翁の如何に現代実業界の成功者として重きを置かれたりしかを知るに足るべし。

以上、略此の商界の偉人が一代を序述し了んぬ。然れども、仰げば愈高く鑽れば益々堅き翁の性行逸事は、之を後昆に伝ふべきもの尚甚だ尠しとせず。今茲に筆を改めて、更に前文の遺を補はんとす。

翁は幼より穎敏にして才智あり、又傲岸なりき。郷鬻にあるや、他の一箇月にして漸く修得せしものをも克く数日にして会得し、教師父兄を驚かしめたる事一再にして止まらず。又根気の強き事他人の遠く及ばざる所あり、其一事業を思ひ立ちて之に着手するや、仮令、中途に於て如何なる艱難に遭遇すとも、徹頭徹尾其素志を翻さず、奮闘邁進、之を完成せざれば已まず、一再の挫折失敗は、却つて翁をして自ら蹶起せしむるの料となれり。特に、正直は翁の特性にして、苟且なる日常の一言一行にも、露ばかりも虚偽あることなく、時としては、余り

に正直に過ぎて却つて他人の忌憚に触れ、為に往々思はざる損害を招く事ありしかども、決して其意を翻さざりき。こは、実に翁が多大の信用を博したる最大原因なりき。翁の如何に正直なりしかは、左の一話之を証して余あり。翁の父は、中井良祐氏に事へ矢掛町に支店を開設したる際、寡からぬ負債を生じたれば翁之が債務を負ひ、債権者に対し年賦にて弁済せん事を請ひ、毎年少許の返金を為し居られしに、明治の初年、正貨と紙幣と混交流通せられし際、両者の価格に非常の差を生ずるに至りたれば、もと正貨を借りたるに今紙幣を以つて返済する時は、債主に一方ならざる損失をかかるととなり、情に於て忍びずとて、翁の家計少しく余裕を生ずるに至り、正貨を調達し、鏗節其他の進物数多を添へて債主に贈り、懇に礼を述べたれば、債主も今更の如く其律義正直を感歎し、悦びて其好意を納受し、爾来は傾蓋の交を為すに至りたりといふ。

翁は機を見るに敏に、また進取的の人なりき。明治の初

年、滔々として泰西文物の輸入せらるるや、以為らく、此勢を以つてせば、洋服の需要益々増加し、呉服業者の蒙るべき影響尠からざるべし、豈久しく旧慣を墨守して止むべけんやと。乃ち、我が最初の模範工場として設けられたる泉州界の紡績場に至り、紡績器械を視察して之を模造せん事を企て、又、明治十七八年の頃には刺繡品の輸出を計り、自ら神戸横浜の間を奔走したりき。

翁はまた活動の権化とも云ふべき人なりき。老いて引退せる後と雖も、常に家事に助力し子弟を督励し、営業上の欠点を視て之を矯正し、又、襟裁器械、文庫裁折器、襟丈筋付器等を工風し、或は精練繻寄器を改良し、或は絹糸紡績に純絹糸を添付する巻付器を考案し、或はまた湯熨斗釜を改良し、其他種々日用品の改善を計る等、一日も優遊徒食する事なく、常に人々を誡めて「人間は働かんが為に生れ出でたるものなれば、毎日食を廃せざる限、勤勞に服すべきものなり」と云へり。

翁は中年眼疾に罹りて左眼を失ひ、亦胃弱に悩み、行商

中は旅館の飯の硬きに困じ、常に小鍋を行李中に納め置き、再び之を煮て喫する等、常人の窺ひ知らざる艱苦を嘗めしも、仏学の造詣深く、堅固なる真諦の上に立たれたるを以て、常に彼の道歌に「朝夕の飯さへ硬し柔かし、思ふままには為らぬ世の中」とあるを思ひ出し、不自由不如意は人生の常事なりと覚悟して、毫も辟易するの色なかりき。

胃病愈募りて一時危篤に陥りし時も、其師なる東福寺の敬冲阿闍梨の教を守り、悟道得度の域に達したれば、泰然自若として敢て死を恐れざりしは、今も猶人の驚歎措かざる処なり。又敬神の念浅からず、常に日本三大社を尊崇し、其祈禱は頗る真摯率直のものあり。家人に誨へて、神に対し願ふ心は斯くあるべしとて、大文字に神前に榜しけるやう

願成就を祈るに非ず。心の穢を払ひ浄め給へ、邪心を去り卒直に為し給へ、一家一族無事息災に働かせ給へと念すべきものなり。

と。其天資の如何に朴直なりしかは、之れにても推知するを得べし。翁の配美津子は、資性温順貞淑にして能く翁に仕へ、勤儉にして人を憐む心深く、徳義を守り家務を励み、克く翁をして後顧の憂なからしめたるは、得がたき良妻賢母なりといふべし。翁が成功の一半は、美津子が内助の力に俟つと言ふべきなり。

噫、翁逝いて茲に七星霜、墳塋一坏の土既に乾き、風霜空しく枯骨に冷かなりと雖も、そが卓厲の志氣と雄偉なる事業とは、炳焉として千歳に朽つる事なし。余、何の幸か、夙に翁に親交してよくその行実と性格とを詳悉せり。乃ち秃筆を呵して之を叙述し、此の商界の偉人が事蹟を後世に伝ふる所以のもの、一は以つて年に月に益加はれる追慕敬仰の意を寓し、一は以つて見ん人が発憤覚醒の料たらしめ、聊か世道人心に裨輔せんとするに外ならざるなり。

一 雲翁が子弟教育の爲め家訓として

定められしもの

品期精選販廉直 不厭身勞要益人

誠実勉強兼節約 安心修道保天真

まことの教

はるばると 行へも知らぬ うみやまを

こえて我身の をさまりと 家をととなふ

ものなれや 榮耀榮華や 身のらくを

習へばつひに そのひとの 立身出世の

さまざまぞ すべて物ごと たねしだい

人をいたはる ころもて 神も誓ひて

まもるらむ ころあたりを 弁まへよかし

汁までもむざとは捨つな米麦の

実をばこなしし物とをもへば

敬ひは我をつつしむころなり

ほこればつひに人にうたるる

ことわざに頭動けば尾もうごく

うへなる人はむざとくらすな

朝寝は貧乏の基ひ

夜遊は愚の至りなり

柔和なれば商売繁栄す

辛抱すれば金も溜るべし

堪忍は身を養うて無病と成

質素は家の長久なり

忠孝はいつまでも忘るべからず

毎日食すれば毎日稼ぐ事と心得べし

何事も思ひやり第一なり日々忘るべからず

以上は毎月一回家族を集め読み聞かせつつあり。又左

の歌は折にふれてよみ置かれしを抜萃せしものなり

恕

よしあしを我身になして心せよ

人のうきふし神や知るらん

新年祝

怠みなく勤め勤めし根さしより

ちちの黄金の花はさきけん

年年に商ひの殖ゆるを喜びてよめる

うり買にまこと尽して励みなば

ひろくなるべしあきなひの道

勝て兜の緒を締よといふことを

思ひ詰めし風強ければうら浪に

まつふく風のをとぞきこえぬ

文明国

仕なれしと思ふはたゆむ基なり

まさるは今日の始めなるらむ

いつまでもけふを始と思ふべし

人のこぞりてすすむ世なれば

家業の栄ゆるをかへり見て

常ならぬ人の恵みをよそにして

おのがちからと思ふべしやは

明治二十八年十月十六日東京中外商業新報を見

て



誰も皆よき事なりと知りつつも

なまぬはおのが身を誇るなり

食を定むれば心定まりてことなく長らふと云ふ

ことをよめる

つつましく食へる程をきはめなば

世にながらへて事やなからん

齊家

年ふとも初のままのすなをこそ

身を修むべきためしなるらめ

商人の歳暮といふことを

まこともて漕ぎたゆまずは年浪を

ゆたかにこえんあきなひの船

召遣ひの者に示すとて

たゆみなく仕ふる道の一寸ぢを

まもらば神もまもるなりけり

教ふともまもらざるこそ哀なれ

つこふるひとの末ををもへば

をりにふれて

世の中にうつる心のまよひより

悪しき道にもなつみけるかな

世の中の流行になつむ人の身は

こころ迷へるすがたなるらん

千人に賞めらるとも一人の賢人に誇らるる事勿

れと云ふことを

人の身を我にくらぶる人ぞなき

ほしやをしやの心のみして

花見んと誘へる人のおほけれど

竹をともなふ人ぞすくなき

流行になつむを悲しみて

ふさはざる事と知りつつ世に連て

人めよそほふことぞかなしき

人は死すとも名をとどむと云ことを

老いぬれば末ぞ短かき後の世に

のこるは人をめぐむなりけり

我行ひを子孫に伝へんとおもひて

玉ほこのみちゆきふりを心して

あゆめばやがて花も見なまし

人は質によりて心異なりと云ことを

春の野の花に睦るる蝶もあれば

秋をかなしむむしもありけり

人人心の異なるを

菊の花種はひとつをいかなれば

色もすがたもさきかはるらん

述懐

家の風長くもがなとをもへども

年ふるままにふきやかはらん

さきの世も此世も旅の空なれば

宿とさだむるかたやなからん

一つ得ば猶も一つとおぼれけり

かぎりある身の浮ぶ瀬ぞなき

まゆこもる蚕に似たる我なれや

糸ゆえあつきくるしみぞする

雨水のにごりに生ふるうき草を

わが家となして虫はすむらん

かばかりの事に躓つく老なれば

此世のたびのほどやなからん

辞世

天地のめぐみに咲ける花なれば

ちりゆくほども風のまにまに

明治二十八年十月十六日発行東京中外

商業新報所載

一読 拍案 実業家言行録十七

細田善兵衛氏富みて其本を忘れず

細田善兵衛氏は京都の富商なり。其初めて京都に至るや、破笠垢衣赤貧洗ふが如し、然るに、其刻苦励精は遂に善く今日あるを致せり。然り而して、氏猶其本を忘れず、画工をして貧時菅笠を背にし天秤棒を肩にして行く状を写さしめ、座間に掲げて朝夕之れを見るといふ。

明治二十八年十一月発行東京中外商業

新報所載

細田一雲翁の寄稿

去十月十六日の中外商業新報実業家言行録に其性行を報じたる京都の富豪細田善兵衛翁より態々左の書を寄せられたり。

二十八年発行貴社の商業新報四千九十四号を他より贈られけるを見て

富めりとも貧しきを忘るる事なかれと云ふ古き教を忘れざるを、此所大阪の毎日のことの葉に載せて、この敷島の広きやまとに告げけるは、いぶかしく思ひしに、此たび猶遠き吾妻の都にも響きしは、守らぬ人の多からん。

海山の暑ささむさの身にしみし

こと忘れぬころよりして

亦忘るる人に

たらちねの親の恵のうきしらて

おのがほこりに身をうづむらん

跋

敵君一雲翁歿せられしより既に七星霜を経たり。爾来我が一族の克く一致協力して業務に勤め家運漸く発展の趨勢に向ひつつある所以のもの洵にそが薰陶教養の賜によれり。回顧すれば敵父の在世中は常に我等を膝下に招き己が少年時代より嘗めたる艱苦辛酸の実状を語り、或は処世道德の大義を説き、或は一家経営の蘊奥を誨へ勤儉力行を奨め驕奢怠慢を誡むる等真情と熱誠とを以つて教導教育せらるること数十年なりき。温容尚眼前に在り譬咳今に耳底に残り追慕の念日に益々切なるものあり。

近江国蒲生郡北比都佐村の人岡崎敬雄氏は慈母の従弟にして故人と莫逆の交あり。委に先考が刻苦経営の実状と勤儉卓厲の性行とを知悉せらる。而して後年終に其事蹟の湮滅せんことを憂へ小伝を起稿して之を余に寄与せられたり。爰に於て翁が歌道に師事せし須川信行氏の序文を請ひ翁の肖像遺訓書軸の写真並びに内助の功ある慈母美津子の小照翁の家訓として遺されし詩歌等を併せて梓

に鑄り、以て一門子弟に頒ち永く祖先の艱苦を知らしめ  
子孫の訓誠に資せんとす。

本書の成る河原一郎氏の賛翼に負ふ所大なり。録して深  
謝の意を表す。

明治四十五年五月

二世 細田善兵衛識

## 一雲翁伝記補遺

### 緒言

先考一雲翁が歿せられてから春風秋雨早くも三十余年を經ました。思慕の情追憶の念年と共に益々加り、在世中の事どもを偲んで、感慨一入切なるものを覚ゆるのであります。

思へば先考は私等にとつて慈愛深き親であると共に事實上の良師でありました。時折私共を膝下に招ぎ、己が少年時代に嘗た艱苦辛酸の実状を具に語り、或は処世道徳の大義を説き、或は一家経営の蘊奥を誨へ、勤儉力行を奨め驕奢怠慢を誡むる等、常に眞愛を注ぎ熱誠を傾けて教養に努められました。諄々として教へ、孜孜として励み口に言はるゝ所は必ず行に示し言行一致実践躬行身を以て私共に活きた模範を示されました。

斯くして先考の生涯は至誠忍耐着実勤勉を以て一貫し、その善行美蹟を通じて私共を訓戒せられた金言佳句のかずくは到底筆紙の尽し難いのであります。殊に祖父の廉潔剛直の血脈を受けた謹嚴の資質は行商旅行中など誘惑に陥り易い環境に在つても身を持つること極めて堅固でありました。為に自然嚴格なる家風に培はれ、私共一族は能くこれを遵守して未だ嘗て品性上に於て指弾を受けるが如き者を出さず、一族互に相戒めて克く一致協力業務に精勵し時代の進運に順応して改善に努めた結果營業漸く發展し、家運又年と共に隆昌に向ひつゝありますことは、洵に先考の薰陶教養の宜を得た賜でありまして私共子孫の深く感謝に耐へない所であります。

私はこの父の後嗣として相続しましたが、世にいう不

肖の子で到底先考の嘗められた艱難、経て来られた行跡の一端だに行ひ得ない者であります。而し何としても譲られた遺業を守り、家名を辱しめないやうにとそれだけは日夕兢々として心掛けて来たものであります。今は隠退して家業を子孫に委ね老後を養ふて居りますが、子孫の幸福と家門の繁栄を冀の念は素より一刻として止んだことはありません。それには先哲偉人の言行等を説きますことも大切でありませうが、それよりも我祖先の遺された家訓、歩んで来られた行跡を直接に伝へ、その遺業の御蔭によつて私共子孫が斯くも安隱に生活してゆけます事を実物教訓によつて示した方がより効果的であらうと考へましたので、茲に思ひ出づるまゝの記憶を辿りて、先考の生涯中や、目星い事実を拾つて記述する事にしました。その上折にふれて書かれた家訓詠まれた和歌を録し、新聞や書物に登載された関係記事を転載し、最後に一代の年表を付記し、別に先妣美津子刀自の事どもを加へて兎も角も一纏として見ました。私は元來

拙筆の上近來老衰から手指震ひ字格乱れて甚見苦しき書体であります。近親のみに頒つものには印刷より手記の方が親しみの意義が深からうと思ひ、老後の閑つぶしといった形で執筆し、この小冊を書遺すことゝなつた次第であります。

毛利元就の一家の結束和合を論した古訓は今更申すに及びません。昭和の雜誌王故野間清治君は「一家の繁栄は親子兄弟仲を能くすることであり、家庭は仲をよくする道を修めるための絶好の道場である。國家の隆昌も結局は人の和が本であり、渾然たる大調和が必要である」と、その遺書中に説いてゐられます。今日の事變を解決し東亜新体制の完遂の為には一億國民の綏親和的威力を發揮することが大切であると唱へられて居りますのも同じ意味であらうかと思ひます。

私共一家もこの和といふことには、平素及ばずながら心掛けて参りました。こうして祖先の遺業を守り年と共に繁栄に向ひましたのも畢竟一家一門の者が常に仲よく睦

みあつて来たことに基因するものと信じます。希くは我一門全社員の子弟後進の諸氏本書を繕くことによつて、祖先の嘗られた尊き汗の体験を知り処世の要道を示された遺訓に鑑み協力一致益々団結を固ふし社業の隆運を図り、家門の繁栄に尽すことを心懸け、仍て以て国家社会への報恩奉公に精進せらるゝことを望んで止みません。

先考の小伝は曩年岡崎敬雄君の筆によつて、一片雲影と題して上梓したものがありますが、本書はその足らざる所を補なひ新たなるものを加へて統編ともいふべきものであります。便宜両書を併読せらるゝことを望みます。本年は恰も先考一雲翁の三十七回忌に相当しますので、これを記念しますと共に追憶の資料にもがなと思ひ本書を一族に頒与することゝしました。

昭和十六年夏日

七十五翁

細田一善識(印)

#### 家祖一雲翁伝記補遺

##### 養子を迎ふ

一雲細田善輔翁の父勘左衛門君は江州日野町中井家の経営せられてゐた、備後国尾道町支店に勤務中、文政年間長男祐五郎君の爲め備中国矢掛町に質物営業を始められたが、祐五郎君の早世により天保十三年蒲生郡岩井村園田惣左衛門君次男源次郎君を養子に迎へ営業を委ねられた。源次郎君は養父歿後襲名して勘左衛門と称し、六十一歳で退隱、六歳と改められたが、同名混同する恐れがあるので以下総て六歳と記すことゝする。

##### 父の死で家業建直し

翁は幼少郷里日野町に於て学業を終り十三歳の時矢掛町支店に赴任、父の命に従ひ義兄六歳君と協力して商務に従事したが、十六歳の時不幸父の死去に遭ひ、ために商機を逸して業績振はず収支償ひ難き悲況に陥つたの

で、経費を節約して今後の建直しを計るべく、日野町の宅を閉鎖して養母妻子を伴ひ矢掛町に移住し、専ら営業の回復に努められたけれども家運拙なく前途頗る暗澹たるものがあつた。茲に経営方針を一変して再起復興を図る必要に逼られたのである。仍て翁は父の甥に当る高村孫兵衛君に商務実習の指導を受け、新たな道を伐り開いて進むべく決心したのであつた。

#### 心身修養に四国順拝

この転向の始めに当つて、先づ心身の鍛錬を行ひ基礎を固むるの必要を感じたので、安政元年十月四国霊場八十八ヶ所順拝の途に上られた。時に翁二十歳。此霊場順拝は難路嶮山相続き極めて難渋の旅程なので、中国地方では青年者等の修養のため先達者が案内役となり、数十名を一団として引率し巡拝せしめるの慣行となつてゐたが、翁は折角順拝する以上は苦難を自ら体験してこそ修養にもなるものだと、敢然単身で決行されたのであつた。

而も其頃四国地方は数十年稀有の暴風雨襲来し各所に浸水山崩れ等があり、加ふるに海瀧起り道路橋梁等の破損も多く、ために数ヶ所参拝不能となるの止を得ざるに至つた。斯の如き危険と困苦に堪へ順拝を終られたのである。翁の事業転向の首途に於てこの順拝を決行せられたことは、翁の生涯にとつて如何ばかり修養になつたか殆ど知ることができない。当時の順拝の納経本は、細田家の家宝として大切に収蔵してゐる。

#### 行商見習五年間

その年の十二月、翁は高村家に寄食して営業を見習ふことゝなつたが、性来の勤勉と熱誠は遂に能く主人の心を動かし、将来独立経営の商人として極めて有望なる素質を有することを認めしむるに至つた。そこで翌安政二年正月資金拾両を授与し、同家の太物販売先である、伊勢、美濃、尾張等の地方に小間物類の行商を始められた。

翁は元来蒲柳の質、加之少年時代から質物業に従事し



て座業が慣習となつてゐたので、重荷を担ふて日に幾里の道を行商するなどには到底堪へ難い所であつた。

翁は中途から半衿商に變つたので商品も幾らか軽くはなつたが、それでもこの不慣な行商に堪へることは並大低の辛苦ではなかつた。翁には堅志力行どこまでも遣り通さねば措ぬといふ感慨があつた。修行五ヶ年間に及び業績も漸次進展して最早一本立となつて、一家の経営に従つても差支えないといふことが認められたので、安政五年翁二十五歳の時高村君を辞し日野町旧宅に帰らるゝことゝなつた。

誘惑に陥らず品性を守る

高村家に修業の五年間は翁の青年時代で、動もすれば陥り易い酒色の誘惑がひし／＼と逼つて来た。殊に行商中旅館に於て各地の商人と合宿し、懇親を重ねるに至つた際、彼等は夜間の閑暇を偷んで遊興に同行せよと勧誘頻につとめるのであつた。

當時は一般に姪風盛んで、殊に検徹の制度なく「男子

自惚と傲気のない者はない」などといふ諺もある位であるから、普通の者なら二つ返事で之に応ずるのが常であつたらうと思はれた。

然るに翁はその度毎に帳簿整理に多忙な事を口実に断ると遂にその帳簿までも持去り執拗に同行を逼られたことも幾度であつたか知れなかつたが、飽くまで意志鞏固で身を持つること謹直であつた翁は断じて之に応じなかつたので、彼等の仲間では翁は一種の偏屈者扱ひにして、いつとはなしに遊樂の相手に誘はなくなつてしまつた。

翁は斯る境遇にあつて能く品性を守り通すことの出来たのはもとよりその純良な性質の然らしめたる所ではあるが、高村君の平素の訓戒が与かつて力のあることを思はねばならぬ。高村君は常に青年の雇人に対して「遊里に於て病毒に感染せらるゝ時は恰も古綿に油の浸み込んだ如く一生これを清洗することが出来ず、病毒は子孫に遺伝し、其罰実恐るべきものがある」と言つて諄々と

して誠められてゐた。翁もこの訓戒を能く遵守して、青年時代を偏屈者で押通して来たため、一身の健康を保持されたばかりでなく、かく我等子孫に病毒を遺伝するが如き危険を避けられたことは我等の深く感謝せねばならぬ所である。

一 眼の失明に屈せず益々家業に奮励

翁の復帰と共に義兄六蔵君は矢掛町の質物業を廃し支店を整理閉鎖して日野町に帰り、翁の業務を助け共に奮励努力したので、家運は日に増し隆昌に向ひ細田家再興の素志は貫徹されたのであつた。翌年翁は六蔵君長女みつ子と結婚し一家の基礎は固められ、前途は益々好望と思はれた矢先、翁は多年の労苦が身体に障つたのか、急性の眼疾に罹り療養の甲斐もなく遂に左眼を失明せらるゝの不幸に遭つた。然れども翁は少しも屈する色なく「艱難汝を玉にす」の格言を其儘実行に移し意志益々堅く従来にも増して仕入に行商に一層家業に勉められたので、家運は日を追ふて繁栄に赴いた。難に遭つて不屈不

撓遂に能く之を突破した、翁の行為は実に感ずるに余りあると共に、我等後進の大に学ばねばならぬ活模範であると謂はねばならぬ。

蛤御門の事変に難を免る

翁は一年に数回京都に出向し、柳馬場蛸薬師下る枅藤事大嶋藤兵衛方を定宿として滞留し、半衿地仕入に当られてゐた。当時恰も元治元年七月の事である。御所内蛤御門の事変が勃発し市内に波及して至る所に焼打事件の騒動が起つた。宿方も危険に逼つたので、知恩院新門前中井家別荘に帳簿や手廻品一切を背負て避難した。然れとも何時襲撃を受くるも計られないので、昼夜旅<sup>（旅）</sup>荘の儘で警戒を怠らず殆ど一睡もせない夜さへあつたが、幸ひ数日後鎮静したので、翁もホート再生の思ひで無事帰郷することができた。これは翁にとつて生涯の忘れ難い試練の一つであつた。

半襟地仕入競争直接製造決心

尾濃勢地方の呉服行商は多く近江商人で、京呉服販売

の傍ら半衿地をも販売する者十数人もあつた。これ等の商人は何れも京都の卸売問屋、日野重事神谷重右衛門、日野芳事沢村芳兵衛、枅儀事宮本儀助、笹利事山協利助等の諸店にて仕入をするを常とし、翁も亦同店で仕入をしたので、自然売価の競争をなさねばならぬ立場に置かれてゐた。翁は斯る遣口では自家独特の長所がなく、所謂団栗の背較べであるから将来の發展覚束ないことを悟り、一年四季の仕入をなすまでの中間長く江州の自宅に徒食せねばならぬ有様であつたので、この期間を利用して、京都に於て直接製造にあたらうと決心し、これが計画を立てられたことは、実に商機に敏なる翁の特質の發揮したものでその先見の明に感服せずにはいられない。

#### 半襟地製造に着手

茲に於て妻みつ長男勝治郎長女いと等の家族と丁稚一人を帯同して京都に來り御幸町四条下る立入伊兵衛君所有の矮屋を借入れて移住し、半衿地製造に着手せられたのであつた。時に慶応二年十月十五日。開業以來日々業

務に対しては別にこれぞといふ指導者もない所から自分で市内を縦横に馳駆して專業者を探索し縮緬等の白生地買入から染色刺繡紋り等の加工者を需め意匠図案を自ら考案し主として商品の優秀と価格の低廉を計つたのであつた。その結果顧客の信用益々増進して、従来副業として取扱つてゐた他の業者は売行不振となつて殆ど廃業したので遂に我店独占の有様となつた。

斯くの如く順風に帆を揚ぐる勢いで目覚しい躍進を遂げたけれども、翁は斯る際こそ自爾自戒して暴利を食らず、顧客本位薄利多売主義を第一として、益々業務に勵精したので年と共に家業は漸次繁榮に向ひ店員も著しく増加し家屋も狹隘を告ぐるに至つた。そこで慶応三年十月予て昵近の間柄である藤村君の親戚安田喜七君の持家高倉御池下る所に移転して業務を拡張し發展に努力したのであつた。

#### 不思議の靈覺治病の奇蹟

翁は元來蒲柳の質で殊に胃腸が弱く、旅行中宿舍の飯

が硬くて食へず、平生手荷物中に小鍋を用意し再び温めて用ゆる等注意を怠らなかつたが、明治二年三十六歳の時激烈なる胃病に悩み食物も殆ど納まらず。旧来の癩と称する病状に彷彿なるものあり。絶食数日間に及んだので最早余命も長くはないと観念し、死後の安心を得んものと、禅学の書を繕いて病床に耽読せられてゐた際、恍惚として夢中に入り、思はず身体の浮揚する如き感を覚え富士山を見んと欲すれば忽ち富士山が現れ、松島に行かんと欲すれば直に松島を見ることが出来るなど何ともいへない不思議の靈覺に感応した。其間恰も一昼夜を過ぎホーと夢の醒めた如き心地の中に甚しく空腹を訴へたので試に食して見ると苦もなく腹中に納り心氣頓に爽快を覚えるに至つた。これを一転機として漸次回復に向はれたのは実に奇蹟ともいふべきものである。蓋しこれは近来唱へらるゝ自己催眠の類ひであらうか、又一面翁の至誠が天に通じ精神的に自癒する靈感を与へられたるものとも見うるのである。

翁はこの再生の喜びを伝ふべく其感想を記されたるものを帖に作り『眠雲帖』と題して永く家宝として保存することにした。

#### 禅学の研究保健の信念

爾来翁は禅学が心身統一に卓効あることを感得し、相国寺門主独園禅師東福寺管長敬冲禅師に指導を受け悟道研鑽に精進せられた。こういふ修養が因で自然自己の病源が察知できて自適の養生法を発見しこれを遵守して老年に至るまで一貫せられた。それで晩年は殆ど医薬に親まず、反へて健康を増進し専心業務に励精せらるゝことができた。翁はこの体験によつて「病氣退治」の固い信念を得られた結果病氣は自己の不注意不摂生から起るものであるから、その発生せざる前に先づ自分で養生法を研究し、自己の健康は自己の手で保持すべく心懸ることが大切であると説いて後進の店員を戒められたのであつた。

製品を改良し信用益々高まる

翁は元來技巧に長じ書画、木工、裁縫に至るまで師を待たずして之を能くせられ、昼間は生地買入染出し等に奔走し夜間は意匠圖案に没頭して、又倦むことを知らない、文字通り昼夜兼行家業大事に精勵せられてゐた。この有様を隣家の家主安田喜七君が望見して、その熱心に感服措かず、且て京都の豪家で古くから東京に支店を有し、京呉服問屋を営まれてゐた安田君の主家榎屋事田中四郎左衛門君商店が近來友仙染の需用多きに抱はらず、信用ある製造者尠く支障を感じてゐられた際であつたので、翁の勤勉誠実に心を動かされてゐた安田君は、翁を推薦して、榎屋商店を援助せられたいと勸説せられたのであつたが、翁は反物友仙の経験が乏しいからとの理由で謙遜して之を受けず、只自家の營業に多少たりとも改良進歩の余地があれば之を實現せしめたいとの念願から、自ら進んで榎屋商店の指導を受けて製造に改良を加へたところ、熱心なる努力は遂に報ひられ、製品が優秀

なるところから売行又著しく、各方面から続々依頼を受け製品は引張瓶で飛ぶやうに売れてゆくといふ繁昌ぶりを示すに至つた。斯くして翁の斯業に於ける信用は日と共に高まり業務亦従つて繁榮を来すに至つた。

行商は養子に翁は友仙染専門に

明治五年義兄六蔵君次女くに子に曩に營業の指導を受けた高村孫兵衛君次男善太郎君を婿養子に迎へ、行商事務を管掌せしめ良店員数名を指揮して販路を近江、大和、伊賀地方にまで拡大したので、業務は日と共に進み基礎は益々堅く將來安定の見透しもつくに至つた。六蔵君には長男源三郎次男武三郎の両君があり家門次第に繁榮を見たので、後年に於ける共同事業の複雑を慮り明治六年資本金を分割して、日野町の細田家は半衿地行商を專業とし、翁は友仙染業を専門とし、各独立營業をなすことに改められた。但半衿地製造は翁の店舗に於て翁自ら嚴重なる監督をせられた。

友仙染專業となつた翁は別に店員を雇入れ、榎屋商店

の外大丸下村商店、越前屋池上弥右衛門、外村宇兵衛、同政兵衛、中村武兵衛、市田弥一郎、其他持下り商人等主として関東向適品を製作したので業務又一段の發展を見て、店舗亦も狹隘を見るに至つた。洵に翁の熱誠の然らしめた所で我等の喜びに堪へないのである。

#### 住宅移転

明治七年一月、江州日野町中井家の分家中井正治右衛門君の支配人藤村幸助君は、翁の京都移住に際し日野町中井家よりの紹介に依つて爾来昵近を重ねてゐたが、京家中井家の整理に依つて藤村君は逼塞の止むなきに至り、富小路御池上る所の持家売却の必要が起つたので、翁に買取を懇望せられた。翁は現在宅は手狭を感じてゐた折柄これ幸ひと、宅地百十坪二階建居宅及土蔵一ヶ所疊建具付を代金七百円を以て買得し直にこれに移転せられた。

#### 源三郎君の不身持營業次第に不振

同年善太郎君と妻くに子相亜で発病して共に急逝せら

るゝの不幸に遇ひ、行商の監督者を失ふことゝなつた。翁は行商の体験から伊勢地方が特に風紀わるく、旅館の外遊女屋など軒を並べ旅客と見ればこれを誘惑して、浪費を強ふるの悪習あり、斯る場所に於て特に一身の謹嚴を保ち誘惑に打克つことは極めて至難のことは夙に承知せてゐられた。

従つて若年の源三郎君に店員を配して行商に当らしめることの頗る不安であるのを感じられてゐたのであるが、何分にも翁は新に一事業を創めたばかりで、此方下手をとられ到底行商の監督をなすことが出来ない事情にあつたので、義兄六蔵君に監督に当らねたいと懇請したが、六蔵君は養子善太郎君を迎へて以来、營業を一任し幾分閑散の身となつた際であり、夙に日野町に物産豊く郷土の産業界が漸次衰退を來すの状態にあつたので、これが救済を思ひ立つて織機の器械化を企図し、夜を日にツイて其研究に精力を傾倒せられてゐた場合であつたので、これを休止するに忍びず翁の勧告を斥け若年の源三

郎君に店員を付けて行商に当らしめたのであつた。これ以来店員は監督を離れたのを奇貨として旅先で次第に放縦に陥り、遂に源三郎君を誘惑して酒色に耽溺せしむるに至つたので自然商売に身が入らず、営業は次第に不振に陥り又挽回の余地なく地方行商を縮少せねばならなくなつたことは洵に遺憾の次第であつた。翁の先見の明があつたことを立証せられたのである。併しこれがため翁が多年粒々辛苦して築き上げた華客を失はねばならなくなつたことは遺憾のことであつた。

#### 半襟地販売の地盤分譲

翁は斯ることから折角拡張した京名産半衿地の地方への販路を杜絶してしまふことを憂へ何とかこれを喰ひ止める方法もがなと考慮を運らされたが、翁が京都移住の際の家主であつた立入伊兵衛君とは久しく親睦を続けられてゐた間柄であり、この人に話を持ち込まれた。元来立入家は刀剣商を営み、一時は富豪の仲間に入りもした旧家であつたが、廃藩以来休業状態になつたので、

息彙三郎君は何等か新規に商業を営み、一業を創始して家名を挽回したき希望を持つてゐたので、早速翁の提議を採納し、従来半衿販売の得意先の内近江、大和、伊賀地方の権利分譲を受け行商を続けることに話が纏つた。

爾来彙三郎君は日々細田商店に出勤して仕入万端を実習して行商を続けることゝなつた。一方細田商店は販路を縮少して経営の持続に力めたけれども、源三郎君は未だ若年で意志弱く一度浸み込んだ遊蕩癖は募るばかりなので、翁は屢々訓戒を加へられたが容易に改悛の情も見えず、店内の仕入場に住居してゐては取引關係に不便であるから他の旅館に転じたい旨を申出でられたので、翁も止むなく之を承諾せらるゝに至つた。

#### 源三郎君の放埒六蔵君の永眠

そこで源三郎君の素行を改めしめる一方法として妻を迎へることに決し、明治十四年二十三歳の時、甲賀郡深川村某の娘この子を娶られたのであつたが、源三郎君の不身持は新家庭を作っても容易に改まらず、家庭の内部

は益々不如意に傾くのみであつたので、暫くにして妻は離別を申出で、生家に復帰したのであつた。こうなると源三郎君は愈自暴自棄となつて乱行は日々募るばかりであつた。六蔵君は永年織機製作に多額の資金を投じ身心の疲労も加はつてゐた際、源三郎君の放蕩を苦し煩悶焦慮を重ねられたため発病し、終に同年十二月六十七歳を一期として逝去せられた。

君は資性篤実温厚で理解力に富まれ、親戚間の紛議や町内の衝突など起つた場合は率先之が中裁に当り巧に説得して円満なる解決を計られたこと尠くない。衆これを徳としてその人格に悦服してゐたので、訃音を聞いて今更の如く悼惜に打たれたのであつた。君にして若今数年間存命し、織機製作の完成を見てゐたならば彼の豊田式製織機に一步先鞭を着けて我工業界に貢献せられてゐたであらうことを思ふと、その長逝は単なる私情ばかりでなく広い公共の上からも一層惜まれてならないのである。

### 源三郎君の晩年

源三郎君は業績不振に伴ひ資産も次第に減損したため、半衿地行商の継統も不可能に陥つたので、明治十七年遂に廃業し、母の里方なる岡崎君の分家岡崎増次郎君より資金の融通を受け、亡父の考案なる織機を応用して木綿織物を創められたのであつたが、收支償はず、暫時にして廃業し京都に移住し、後甲賀郡信楽村奥田きみ子を妻に娶り転々として諸種の業を搜り歩いたけれども何れも成功に至らず、その中子女も成長して長女ゆう子は、運送業者堀市太郎君に嫁し、長男信太郎は足袋製造店に勤務したが、後退店して父源三郎君と共に足袋製造販売業を始められた。その際は京都細田家並に江州の親戚からも相当の援助を与へたのであつたが、これ又失敗に終つた。信太郎はその後も挽回の期なく不運にも病を得て早世したのであつた。次男保三は姉婿に当る堀運送店に勤務し実直に勤めたので漸く古参となり、大正十四年橋爪光枝を妻に娶り、業務を励み寄る年波の父を扶養



し同居してゐるのである。

斯の如く源三郎君は壮年時代から波瀾曲折浮沈常なき不安な生活を送り、一時は親戚や知人から指弾されたのであつたが、子女の成人後は収入は豊かではないが、兎も角家計に事欠かぬだけの生活をなすことが出来、老後悠々として天命を楽しみ、七十六歳の長寿を保つて、昭和九年五月長逝せられた。自分の不身持から成功は出来なかつたが、晩年は先づ平穩に暮し天寿を全ふし得たのは祖先余徳の賜に依るものといつてよからう。

善三郎君を守り立て宗家の再興を計る

義姉ぬい子刀自は源三郎君と同棲することを欲せず、日野町の旧宅に寂しく暮してゐられたので、翁はこれを氣の毒に思ひ晩年に至るまで手篤く扶養して慰安を与へられた。曩に歿した養子善太郎君に善三郎といふ一子あり、ぬい子刀自は心から愛せられてゐたが、明治十八年小学校を卒業した。十三歳の時翁はこれを引取て養育せられた。翁は安政二年創業以来、幾多の艱難を経て漸く

商業の殷賑を来し、祖先に孝養を尽すと共に生活も安定し、一家は春の如く和楽を共にすることが出来たのに、偶々後継者の不心得から家業は衰退し家産は蕩尽し、一家離散の憂目を見ることゝなつた。有為転変の世の中とはいへ、翁にとつては実に身も世もあられぬ絶大なる不幸であり、人知れず男泣きに泣されたことも幾度あつたか知れぬが、翁の不撓不屈飽まで成功せずんば止まない熱心と岩をも通す堅き志とはこれしきの事で挫折するものでなく、粉骨碎身夜を日についで事に当り若年の善三郎君を養育し之を守り立て日野町細田家の再興を図るべく奮闘を続けられたのであつた。

こうした誠意は遂に報いらるゝ時が来た。善三郎君は長ずるに従ひ能く翁の訓言に聴き、忠実に業務に従事すべき善良なる商人としての資質を具へうるに至つたので、翁は育て甲斐があつたとて、大に喜び店員に列せしめたので、善三郎君も亦翁の厚誼に感激して誠意命に服し家業に勉強せられたので、数年ならずして一家の基礎

は確立し、明治三十三年分家して今井千代子を妻に娶り目出度再興の実を挙ぐるに至つた。

### 正価販売の断行

京都商人の商法は普通売主は過分の高価を唱へ、買主は之と反対に無暗に安価に求めやうとするので、この間折衝に数時間を要し、漸く妥協成り拍手して売買を實行するに至る慣例であるが、これがために徒に数時間を空費し相互の不利益甚しいものがある。そこで翁は断然この悪習慣を廃止して薄利多売主義を以て一切の懸値を廃し、正価を定めて販売することに改めるべく決心し、これを實行せられたところ、一時は顧客の感情を害したやに思はれたが、日ならずして他店に比し廉価なることが一般に周知せられて信用倍加し好評噴々商勢次第に繁昌を告ぐるに至つた。

### 帯地製織の責任を果す

或年顧客の一人である越前屋商店から、翁の店へ綴錦織帯地の注文が来た。同品は帯地中の最高級品で取扱者

も少なく兎角高利を貪るの状態にあつた際、翁の誠実を認めてこれが製造を委嘱せられたのである。翁は該品に對しては未だ何等経験がなかつたが自分を對する信頼を裏切つては相済ぬと責任を以てこれを引受ることを決心し、百方奔走の結果洛西御室村に適當なる製造家を発見し、これに囑託して製造せしめ薄利を以て納品せられた。意外の廉価である上最も優秀なる出来栄えなので越前屋商店は大満足で、翁に謝意を表するため未だ交通の不便の折柄専用人力車を雇入れて東海道を上らせ、東京支店に招待して賓客として厚遇数日市内及付近を觀光せしめ以て翁の情誼に報ひられたのであつた。

### 信用も高まり色染注文

越前屋商店では、これを契機として、益々信用厚く翁を信頼せらるゝやうになつた。その頃絹裏地花色染の專業者は市内に数人あつたが、俗に「紺屋の再明日」といふ諺に洩れず、業者者間には従来期日遅れの悪習慣があつて、各商店とも困惑をしてゐた際であつたので、翁の

誠実によつて少しでもこの弊風を打破したいとの考のもとに更に大なる注文を与へらるゝことゝなつた。翁に於ても自分を信じて囑託せられたる以上如何なる犠牲を払つても謝絶するは本意でない、敢然これを受諾したのであつた。而も何分にも友仙染業に昼夜を分たぬ努力を捧げて寸暇を得ない多忙の身であつたので、別に聊か経験のある稲垣友七なる人を傭聘して該事業の専任に當らせたのであつた。

#### 欠損を度外して染料売却決済

元來藍染用原料は收穫期に於て一時に多量買収し置くの要あり。未だ資金豊かでない折柄越前屋商店から融資を仰ぎ経営せられたところ、兎角収支償はず欠損に欠損を重ねる有様であつたが、創業後未だ日浅き今日に廃業するは遺憾である、尚此上勉勵して成功を期することが肝要なりと鞭撻激励を加へつゝあつた際、計らずも越前屋商店内の重役と支配人間に軋轢を生じて支配人の退店となり、これと共に従來の契約はすべて解除せられ融資

金の返却を求むる督促頗る急なりしたため、藍玉原料を売却するの要に逼られるところ、買収の際粗悪品の混入してあるのを発見したゝめ多額の欠損を生ずるに至つた。

#### 奸商の悪計に屈せず奮勵挽回

その後聞く所によると、該事業を細田家に於て経営し、成功せしめることゝなると、他の同業者の蒙る打撃尠くないことを見込み、故意に翁の事業に妨害を与へやうとの悪計から窃に職工を潜入せしめて染色用の染汁を排流せしめて欠損を醸さしめ、又藍玉商人内に悪疎者多く我経験の尠きを奇貨として粗悪品を混入せしめて一層の損失を蒙らしむべく画策した事が発見した。その結果損失金三千余円に及んで、今日迄勤儉努力孜孜として漸く成功の曙光を認むるに至つたものゝ創業以来尚日浅くして資産も豊かならず、殆ど資財は滅尽の悲境に陥つたけれども屈せず、僅に資金拾両を以て創業したる往年のことを想起して、一層緊縮を加へ店員は丁稚数名を残して大減員を行ひ、番頭手代には數金を与へて解雇し、此

際大革新を図つたが、資金欠乏のため、生地買入にも支障を来たしたので、悉皆業を兼營し麻風呂敷を作り翁自ら商品を背負ひ顧客を訪問する等昼夜の別なく勉勵奮闘を続けたところ、予てから越前屋商店の無情なる仕打に憤慨し、翁に同情してゐた際とて、顧客はこの時こそと続々注文を發して、翁の事業を助くるの挙に出でたのであつた。茲に於て翁の事業は年と共に頽勢を挽回し数年も出ずして元の通り隆盛を見るに至つた。これ実に明治八年翁の四十二歳で俗にいふ厄年に當つてゐた。尚翁の使用せられた麻風呂敷は当時の労苦を偲ぶ記念として保存してゐる。

先約を違へぬ眞の商人道

明治十二三年の頃は曩に西南戦役に依り政府は戦費のため、多額の不換紙幣を發行せられ、依之銀貨百円は百七八十円を唱へ随て物価の大暴騰を見るに至つた。顧客中村武兵衛君は毎夏夏季營業の閑散なる場合には秋冬用品の買入を予約せらるゝのを慣習としてゐたが、翁もこ

れに應じほど正価を定めて予約販売で取引を開始された。然るに夏季以後織物類暴騰となつた。翁の手許はみす／＼損失を来すこと明となつたにも拘はらず、翁は一旦予約せしものを違約するのは眞の商人道でない、依然前約の正価を以て製品の納付を完了したのであつた。

他の商店ではこの暴騰は全く予断し得なかつた所であるからとて、違約して納付せなかつたものが多かつたのに、翁独りこの快挙に出たので、実に稀に見る廉潔の人であるとして信用益々高まるに至つた。

紅定商店と美はしい厚誼

江州五ヶ莊紅定商店塚本定右衛門君は翁の清廉実直なるを伝聞して、翁に取引開始の希望を申込みたが、翁は予てから中村武兵衛君とは横浜及相模地方に於て、常に紅定商店と競争の立場にあることを承知してゐたので、其取引を拒絶せられた。然るに紅定商店は他に販路も広く必ず競争を回避すべしとの言明があつたので取引を開始せられしところ、同家主人は翁の誠実を激賞して

止まず、爾後屢々来訪して往事を物語りなどして常に破格の愛顧を受け、後年東京で半衿業を創むるに際して同店に販売を開いて我店を援助せられたが、他の商務次第に多端となるに及んでこれを廃せられた。その際華主を我店に譲与せられ、甲府への出張販売を始め日々の来客に対しては我店に紹介の労を取らるゝ等専ら好意を寄せられたのであつた。これ全く翁の廉直誠意の致す所であるが、翁は塚本家の慈悲厚く、而も勤儉誠実なるに敬服して常に感激措かず、自分の死後に於て何等か相談を要するが如き場合起らば必ず同君の指導を受くべきやう懇諭せられたのであつた。

#### 布施君と翁との交誼

是より先き中村武兵衛君支配人布施多助君は、京都仕入店に滞留の際突然発病し、店内にて療養中病勢逐日昂進の状態にて不安が加はるに至つたので、翁は甚優慮して隣家に一戸を借受け病人をこれに移し、看病人を雇入れて看護に当らせたばかりでなく翁自らも懇切に介抱せ

られた結果程経て快癒せらるゝに至つたので、布施君は非常に感謝せられ、爾来翁を生命の親として尊敬し特別の厚誼を結ばれるやうになつた。

そこで布施君は、翁に対し報恩の意に於て、何等かのことをせねばならぬと考へ、営業を拡張して全国一の大都市たる東京に進出せられなば、前途頗る有望なるべしとて、その断行を懲慚せられ、これに關しては万事便宜を与ふるべき旨をも告げられた。元来翁の店は東京方面に販売の顧客多く、自然各店と競争となるのは明らかであるからとて、翁は東京進出に幾分躊躇されてゐたのであつた。

而して翁は安政二年伊勢、美濃、尾張諸国に半衿行商を創め千辛万苦の末漸く業務の發展を來し基礎の安定を見るに至つたが、計らずも後継者の怠慢に依り廃業の止むなきに至つたことは終世の恨事とせられてゐたので、これが挽回策として東京地方に於て半衿地販売業の再興を決意せらるゝに至つた。

東京進出の下準備

半衿地は元来小裂品であるが、その品に上下あつて又販路も広く将来有望なるを自信せられてゐたので、これを好機として東京方面に大発展を計画せられた。明治十七年私が十八歳の時東京方面に於ける半衿の嗜好及販路の見込状況調査を命ぜられたのであつた。そこで私は同年三月顧客なる不破善助君店員の東上せられるに当り視察のため東海道を同行して、横浜市布施君方に滞在し同家の華主なる各呉服店にて、半衿を借受けて之を描写し、尚同家の取引先なる横浜及東海道、横須賀、浦賀其他各地に同道出張して親しく販売の状況を規察した。亦東京市内の半衿問屋数店を巡り参考品数十点を買入れ、五月中旬に海路帰省し翁に復命したのであつた。翁は半衿地に関しては既に十分の経験があつたので、右の参考品や描写等を資料として、工風研究を重ね統々として新意匠のものを考案して製造に着手し、九月に至り第一期販売予定数を完成し好成績を収めたのであつた。

立入伊兵衛君と翁とは曩に半衿業譲渡のことあつて以来一層親交を重ねる所があつた。同君は翁の厚意に報ゆるため、親戚なる江州八幡町村西友八君弟善之助君を翁の長女いと子の婚養子として媒酌せられ、明治十七年七月結婚して同町内に分家せられた。

同年九月私は義兄善之助君に従ひ、伊勢四日市港より汽船にて横浜に至り、布施君の一室を借受け、同市内に販売を開始した。而して布施君の斡旋に依り、各呉服店に取引を得て更に東京に進出したのであつた。

東京支店の成功

東京市日本橋区田所町浅古文次郎君は江州日野町在鎌掛村対中久七君の弟で日野町細田家と姻戚であつたけれども永く音信不通の状態であつたが、浅古君は少年時代から東京の金巾問屋に勤務せられ、後袋物商浅古家に迎へられて養子となり、金巾裏販売業を創められたところ、漸次発展して成功の域に達せられ、偶々京都に来て翁を訪問せられた。翁も亦既に成功の域に達せられてゐ

たので「ようこそ来て下さった」と久瀨を叙しつゝ互に  
歓談數時に及んだ。その結果翁が東京に進出の場合諸  
事斡旋すべきことを口約せられたので、翁は大にその好  
意に感謝して東京進出の方針を定め、東京では浅古君の  
一室を借受けて販売を開始したが、翁の努力は遂に報ひ  
られ、市内各店から大歓迎を受けて暫くの間は手持品は  
払底を告ぐるほどに売尽してしまつた。そこで兩人は帰  
宅して第二期の販売品製造に着手したのであつた。

爾來義兄善之助君と私は東京に出張して販売に當つ  
た。然るところ京都に於ける友仙染販売業並に半衿地製  
造のため、翁の事務次第に繁劇となり製品に欠陥を生ず  
る懼があつたので、私は翁の助手として製造に携はり、  
義兄を主任として店員數名を伴つて東上し販売の衝に當  
つたが、年を経て業務擴張と共に浅古君の一室にては手  
狭を告ぐるに至つたので、日本橋区小船町旅館虎屋久左  
衛門方に移つたのであつた。

義兄善之助君は、其後事業の發展に努められ、布施君

の販売地域に在る東海道、横須賀、浦賀、川越、厚木、  
伊勢原、八王子等に販路を擴張し店員數名行商に當つた  
ので旅宿も亦次第に手狭となり、且不經濟となつたの  
で、明治十九年五月日本橋区葺屋町に借地二十坪土蔵付  
一戸を代金三百円を以て買得し支店を設置することとな  
つた。

#### 山脇君との親交

縁戚に當る江州神崎郡小幡村山脇作五郎君は、高村孫  
兵衛君次女とみさんの女婿で、予てから翁と親交があつ  
た。嘗て山脇君は我國の前途が大に國富の増進せねばな  
らぬ情勢を洞察して、桑園を拓き養蚕を起し、亦牧牛搾  
乳の事業を始める等新進の氣概に富み有望の事業を經營  
してゐた。翁は常にこれを畏敬し懇情を重ねつゝあつた  
際、明治十五年政府は時の大蔵大臣松方正義伯の献策に  
基き兌換券の發行により、銀貨百円が百七十円を唱へ  
てゐたものを、一時に同額通用となり、加之各地に水害  
を頻出し殊に明治十八年の淀川大出水により、大阪市で

は天満、天神、難波の三大橋を流出し市内を中心に淀川、木津川沿線各地の浸水甚しく、近畿地方民の疲弊其極に達した。京都でも西陣方面の機音は殆ど中絶の姿となり、我友仙染業も全く休止の有様となつてしまつた。

折柄山脇君は将来一家の安全を保つには田畑を所有するが得策なる旨を教示し、明治十九年大阪府嶋下郡鳥飼村豪農中谷藤太郎が水災等のため破産に類し所有田畑売却の希望があることを聞知して、之が買得方を翁に勧誘せられたので、翁も商業不振に基く事業縮小の際で資金に余裕があつたので、山脇君と共同で買収することに約整ひ、山脇君は私を伴ひ現地に出張買収に当つたのであつた。但当時の地価は上田一段歩金百円、中田六七十円、下田三四十円で、これを五五掛を標準として総計七町六段余畝歩を代金二千七百余円を以て買収を完了した。而して収納小作米は上田一段歩二石、中田一石五六斗、下田一石二三斗で、当時一石代金四円五十錢より五円位で、租税村費並に凶作十ヶ年間に二ヶ年を皆無とし

て相当の利回りになる見込であつたから、相互権利義務は折半の約であつたけれども、山脇君は奥羽地方に太物行商をなす外新事業の経営に依り遊資乏しく到底出資をなすことはできなかつたので、翁は貸金の形式で全部の出資を行ふたのであつた。

#### 刺繡品の貿易に乗出す

翌明治二十年に至ても尚商況挽回の兆なく、益々失業者増加の状態が続いた折柄、海外への輸出貿易勃興し殊に刺繡製品は著しく活況を呈するに至つた。そこで我店へも取引のある刺繡業者からこれが取扱方を懇望せられ、翁も其請を容れて賛意を表された。元来翁は四面環海の我国では海運を利用して輸出の増加を計ることが国富を増進する最要の手段であるとの意見を持ち、これが実行を痛感せられてゐた矢先であつたので、早速山脇君に相談せられたところ同君は双手を挙げて賛同せられたので、直に損益折半にて共同事業を創められることゝなつたが資金は翁の一手にて支出せられた。



そこで山脇君は親戚に当る店員細井弥一郎君を主任として、斯業に経験を有する中瀬莊三郎君を傭聘して事業に着手した。社名を産栄社と称し本社を細田宅に置き、市内は勿論遠く阿波地方に及んで製造せしめたのであつたが、翁は江州地方に婦人の失業が夥多あることを見てこれを活用して刺繡製造を起すべく決意し、まづ江州彦根町と小幡村に刺繡工場を設置し、技術者を雇用して募集女工の指導に当らしめ、製品は専ら神戸の外国商館に売込み尚横浜の外国人にも特約して輸出を試みたのであつた。

然るに斯業の勃興に当て込み各地一時に製造に着手した結果忽ち製産過大供給超過を来し、単に目先だけを切抜けやうとする投売者の簇出を見たるため価格は大暴落を来し、その上に細井中瀬両君の経営放慢に基く損失も加はつて工場の維持も困難を来すに至つた。そこで両君は退社し山脇君の養男安吉君が入社して整理に当り一意回復に努力せられたのであつた。

#### 破婚から山脇君と疎遠

これより先き山脇君は養男安吉君の妻として、翁の次女てい子を迎へたいと懇望せられた。翁は子てから昵近の間柄でもあり少しも遲疑する所なく快諾せられ、明治二十一年五月結婚成立して、てい子は小幡村山脇家へ入嫁したのであつた。然るに同家内部の紊乱予想外に甚しく将来の経営頗る悲觀の状態にあることを発見したので、同年十二月離婚を求むるの止むなきに至り、山脇君の懇願があつたにも抱はらず、翁はこれを受諾せず離婚を決行せられたのであつた。これを動機として遂に両家間の感情悪化し、山脇君は従来からの共同経営なる耕地並に刺繡品貿易の両事業から手を引き、細田家に於て出資全部を負担するの止むなきに至つた。加ふるに耕地は現地取扱者池上長造なる者の不正行為が発覚し、又同村民間の氣風が不良で到底永く所有することの不得策であることが明になつたので、同二十四年みす／＼損失を忍びて之を売却し耕地の所有を断念したのであつた。又刺

繡品貿易の方は、私が友仙業の傍ら整理に務め経営に苦心して専ら回復に努力したので、漸次その効果が現れ前途稍曙光を認むる迄に漕ぎつけたのであつた。

善之助君の発病、東京支店発展

然るに茲に意外な不幸が持ち上つた。それは女婿善之助君の発病である。君は東京に於て半衿地販売の衝に当られ漸次発展の趨勢にあつたところ、明治二十二年五月東京に於て発病し店務を見ることが出来なくなつたので、私は迎へに行き京都に帰つて静養せらるゝことゝなつた。従つて東京店は二三の店員のみで營業に支障を来すに至つたので、止むなく私が東京に留まつてその経営に当ることゝなつた。茲に於て京都本店の友仙染販売並に刺繡品貿易業は一時休業の止むなきに至つたのであつた。

以来東京支店は次第に殷盛を呈し、旧来の店舗は狹隘を告げるに至つたので、翌二十三年一月日本橋区久松町に借地四十五坪土蔵二ヶ所付を代金九百円を以て買得し

直に移転した。同年七月には善之助君も回癒したので、屢々東京に出張して業務を執筆するやうになつた。

翁の隠居、子孫の安定

その翌二十四年五月私は藤井孫慶長女たか子を妻に娶つたので、これを機会に翁は退隱別居して名を善輔と改め、私が相続して善兵衛を襲名した。そして一家一族の基礎を固くするため善之助善兵衛に各資金を分割して共同事業として、互に協力し将来一層の発展を図るやうに計画せられたのであつたが、その年の八月善之助君は突如分離して独立營業を開始したい旨を申出でられた。斯くては折角翁の計画せられた素志にも悖るので、翁は媒酌人立入伊兵衛君を介し百万慰撫翻意を促したけれども、善之助君の意志鞏固でこれを諾するの意なく、翁は止むなくその独立を認むるに至つた。斯くして善之助君は同年九月東京日本橋区田所町に移住して前掛地並に風呂敷地間屋業を創始せられたのであつた。

爾来私は京都東京間を往復し、翁の助力を受けて、弟

永輔、従弟善三郎を指揮して店務の監督に当たつたので、其營業は漸次進展を見るに至つたが、翁は将来基礎の鞏固を図るため明治二十八年翁始め善兵衛、永輔、善三郎等を糾合して、資本金壹万円の合資匿名組合を設立した。但此際塚本家主人の指導を受けられたのであつた。

#### 有益なる業務上の考案と発見

翁は常に「一日作らざれば一日食らはず」との格言を服膺して暫時も徒食することなく、我等子孫のために図られた。明治二十八年東京支店が手狭となつたので、隣家を買得して増築した際にも態々出張して工事の監督に当り、又同年京都の別家者専用の家屋数戸を建築するに當つても毎日工事場に出張して監督し、時には自ら壁下地を作り堅牢に注意すると共に経費の節減を図り、更に同三十六年隠居宅に地下室付土蔵を新築して避暑室を設くる等、翁独特の最新式考案を以て設計に当られたので、建築業者も其熱心と造詣の深きに感嘆したのであつた。

翁は退隱後も私の東上不在中は時々店に來られて店員を指導督勵し、明治二十五年頃婦人用紋付頭巾地の流行せし時従来の染色法にては紋縁鮮明ならず、茲に於て簡便なる板縮式を考案せられたが、その製品は紋上り鮮明優美にして、而も工費低廉で一般に歡迎を得たところから、我店の染色を命じてゐた某は自家考案の如く宣伝して、其染工の吸収に努めた事が發覺し翁の遺責に遭ひ恐縮したなどの挿話もある。

半衿地はもと小幅縮緬は二つ割、中幅縮緬は三つ割に裁断するので、裁断の際一人は其布地を持ち、一人は鋏にて切断することから二人の手を要するのであつた。翁は常にこれを遺憾とし衿地挟み器を考案して、一人にて裁断しうることを發見せられ、爾來非常に便益を得たのであつた。

衿地用文庫紙は仙花の厚紙を用ひ、これが裁断には相當の努力を要するため之が器械化を考案せられた。又文庫紙筋付け折器を製作せらるゝ等翁は元來進取的頭腦の

持主として事業経営に幾多の工風改良を図られた事は枚挙に遑ないほどである。最後に半紡縮緬と称する紡績の緯糸に純絹糸を添加しても強撚のため紡績糸の内部に潜入して比較的光沢の渺きを遺憾としてこれを外部へ螺旋状式に添付する器械を考案して其製作に努められたが、其頃から発病せられて終に成功を見るに至らなかつたことは惜みても尚あまりあるのである。

翁は我営業上に対し種々改良工風を施され、其便益を受くること一再ならず。而も晩年に至るまで終始一貫倦む所を知らず発病直前までも之を捨てず、我等のため努力を続けられたことは感謝に堪へない所である。

#### 翁の歌道と趣味

翁の父君は晩年和歌を嗜まれ歌道の遺書もあつた。その血を受けた翁も和歌を好まれ、初めは独学で研究せられてあだが、精神修養にもなり、又僅少の費用にて事足るところから、これが習得を思ひたち、後には師に就いて練磨せられた。翁は何事にも其蘊奥に達せれば止まら

るの気概があり、歌会にも出席して研鑽に勉められたので、漸次上達して屢々会選にも入り、還曆に當つた際は自宅に歌会を催して、歌友の来会を需め、会員中でも高級の部に属せらるゝやうになつた。翁は歌書を素読するも記憶に残りがたいからとて、筆写せらるゝを例としてゐた。今其遺稿数部を繕くに細字で而も字格整然として居り、実に其精根の強靱なるに驚嘆されるものがある。

翁は晩年手指震ひ執筆至難となり、終に歌詠を廃止せられたのは遺憾であつた。翁の歌集の中より処世上裨益するもの数首を選び冊末遺稿の部に輯録することとする。

翁は又易学の造詣深く周易の鑑定には常に首肯に価ひするもの渺くなかつた。知己などが屢々来訪して教を乞はれたことがあつたが、翁は周易は神聖なるもので決して利欲等のために用ゆべきものにあらざとして、物価高低の鑑定などには一切応用せられなかつた。翁が愛用せられてゐた、易学書並に算木筵竹等は大切に保存してゐる。其他碁将棋等も相等の技量を有せられたやうであつ

たが、壯年者に悪習を及ぼすことを考慮して余り用へられなかつた。

### 翁訓誠の齎

翁は壯年時代から、細田家再興のため艱難辛苦を凌ぎ営業に勤勉努力して大成し、我等一族を指導鞭撻せられた。私が相続して営業を継承後は、永輔、善三郎両氏の援助と店員の一致協力に敢て失墜を見ず、漸次発展したのは、全く翁の愛護訓誠の齎で感謝に耐へない所である。翁は常に営業は我等生活の基礎なれば、主君の如く尊重し身命を賭して専心奮励すべきものであると誨へられた。

又翁は予て資金の一部を積立して非常時の支出に準備するやうに教へられてゐたので、其造成に努めつゝあつた際、大正十二年九月一日関東地方の大震災に遭遇して一時支障を来した時、未だ少額の準備ながら、該資金を以て急場を凌ぐことのできたのも翁の周到なる恩恵によることゝ感激したのであつた。

翁の歿後に至つても一族は克く遺訓を遵守して、質素力行業務に勉めたので、業績は益々進展して同業中に於ても半衿業界の霸王なりとの讃辭を呈せられるに至つた。

茲に一族家庭の経過概要を追記して翁に対し感謝の意を表するの一端とす。我子孫能く翁の遺訓を遵奉して互に専横を慎しみ一族和協力し、共存共栄を図り営業の隆昌と一家の長久を希ふて止まないのである。

### 翁の家庭

#### 長男勝治郎と長女いと

翁に四男三女がある。長男勝治郎は齡五歳で京都に携帯移住せられたが、不幸にして翌慶応三年四月夭折した。長女いとは三歳の時京都に移住して、明治十七年二十一歳で婿養子善之助君を迎へ分家せられた。後夫は義弟善兵衛と半衿地商に従事し屢々東京方面に出張して販売の衝に当られたが、明治二十四年八月分離して東京日本橋区田所町に前掛地並に風呂敷地問屋を創業せらるゝ

に当り、夫と共に移住せられた。其時長女のぶは齡六歳で携帯せられたが、不幸翌年十月夭死したので、夫妻共に大いに落胆せられたが、幸ひ同二十七年一月長男秀治郎が出生して、又同三十一年二月次男房治郎の出生があつたので、爾来營業も發展して幸福に日送りをせられたのであつたが、明治三十八年不幸善之助君が発病せられたので廃業の止むなきに至つた。後療養に努められつゝあつたが、早急に回復の状も見えず、同三十九年生地江州八幡町に一家を設け、同棲して静養せらるゝことゝなつた。大正二年細田商店名古屋支店の監督者が欠員となつたところ、幸ひ善之助君の病氣も回癒せられたので細田家の委嘱により夫と共に同店に赴任せられた。之より先き長男秀治郎は、細田商店に勤務して実直に努められ漸次昇級して大正十年通勤の資格となり、善之助君と共に名古屋より京都に帰り、同年二月宮川いち子を秀治郎の妻に娶り同棲せられた。秀治郎は同十二年細田合名会社の社員に加入した。次男房治郎も細田商店に勤務して

誠実に勉勵した。大正十五年同族芳三郎の姉姪子の婿養子に迎へられ結婚分家したが、昭和五年十一月不幸姪子は二女兒を遺して早世したので、翌年山岡みつ子を後妻に娶つた。善之助君は病養中の徒然に歌道を学び能く研鑽蘊奥を極め上達せられ、老後悠々自適して幸福に日を送り、昭和七年七十七歳に達し妻いと子又七十歳となり、然も夫妻同棲五十年の金婚を迎へ祝賀を催された。我一族中稀有の慶事で一同も大いに祝意を表した。善之助君は翌昭和八年十月七十八歳の高齡に達し眠るが如く大往生を遂げられたのであつた。いと子刀自は同十五年喜寿の賀宴を開かれた。秀治郎、いちの両氏は終始母に孝養を尽され今年七十八歳の長寿を保ち、近来視力は幾分減退したけれども他に何等の病態なく、老ひて益々健康に日を送られてゐることは我等にとつて心強い極みである。尚我等兄弟姉妹が五人も揃ふて長寿を保ちつゝあることは、類ひ渺き幸福で、これも翁の養生法を教へられた恩沢であると喜悅に耐へない所である。

### 次男儀三郎

儀三郎は即ち私で、慶応三年八月御幸町四条下る所の矮屋で生れたが、長兄勝治郎君夭折後の出誕で両親の寵愛を受けたが、生来蒲柳の質で幼年の頃は屢々病魔に犯され、医師の勧告により小学校も中途退学して専ら療養に努めたので、十二歳の頃漸く健康を回復したので、遅まきながら、其頃町内に居住せられた高木知栄君に就き漢籍と習字の講習を受けた。又我営業に意匠考案の必要があるので絵画を学び置くの肝要なるを察し、齡十三歳の時幸野榎嶺画伯に入門せしめられたのであつたが、運動不足で時々病気に罹り暫くにして退塾した。爾来身心の鍛錬と運動のため丁稚と起居を共にして清掃雑事と商務に従事せしめられたので、追日健康を回復した。明治十七年半衿地業開始に当り東京に出張して視察をした際、曩に修得した絵画の技術を活用して多大の便益を得た。これ全く翁の先見によるもので、今更の如く感謝に耐へないのである。同年九月義兄善之助君と共に横浜東

京に出張して半衿地販売に当り、後半衿仕入友仙染業並に刺繍品輸出業も兼務した。明治二十四年五月藤井たか子に妻に娶り相続して善兵衛を襲名し営業を継承した。同四十三年一族を以て合名会社を設立して社長となり、私が五十歳になつた時営業の主権を弟永輔に委ね、私は神社、仏寺、教育、慈善、社会事業等に尽し私が還暦の齡に當つた昭和二年株式会社を組織し営業を継承して永輔を社長に任じ、私は合名会社代表社員として専ら一家の監督と社会事業に貢献しつゝあつたが、昭和七年発病したので各種関係の囑託事務一切を退任して静養に努めた。同十一年古稀の齡に達したので退隠し祖父の名を継承して勘左衛門と改め、長男真治郎相続して善兵衛を襲名した。昭和十二年社長永輔が退任せられ、善兵衛が社長に就任して会社業務を統率してゐるのである。これより先き真治郎は関谷淑子を妻に娶つた。又私の長女、次男、次女は夭折して、三男宗三郎、四男富三郎は共に弟永輔に養はれ、三女あいはいは妹てい子の養女とな

り、五男慶造は分家して加藤駒子を妻に娶り、私の息娘は幸ひ子女数人宛を得て円満な家庭を作りつゝあることは最も欣快とする所である。これで私一代の任務は一と先づ終了したので、老後何等の懸念なく幸福に日を送つてゐる。

次女てい子

てい子は明治三年二月高倉御池下る所に出生し、同年富小路御池上る所に転住し、柳池小学校卒業後裁縫を修め、猶自宅に於て家事を習得した。同二十一年二月親戚高村孫兵衛君の媒酌により山脇安吉君と結婚したが、家庭の紊乱が甚しかったので、同年十二月離婚の止むなきに至つた。同二十五年二月当市生糸の老舗世継猛之助君に嫁したが、大家の末路到底経営の見込なく、同二十八年復帰せられた。更に同二十九年七月、長谷川友三郎君を婚養子に迎へ分家して東京地方で帯地卸商を創められたが、養子は素行修らず、浪費の結果決算不能に陥り終に出奔して居所不明となつたので、止むなく同三十一

年七月離婚して分家を廃し復帰するに至つた。てい子は斯くして再三の不幸続きで全く氣を腐らし、これ以上再婚を欲せず、隠居宅に養はれ晩年を両親に孝養を捧げることゝなつた。てい子は資性温順で能く父母の命に従ひ、又夫に仕へ貞淑一家の経営に専念して将来の安定に勉めたのであつたが、不辛度々破鏡を見るに至つたことは真に同情に堪へない所である。後兄善兵衛三女あい子を養女として愛育し、大正十三年二月加藤栄蔵を婚養子に迎へ結婚して入社し現に株式会社の重役となつて、營業の發展に努力しつゝある。栄蔵は性温堅着実で部下の信頼厚く、殊に孝心深く能く養母を勞り、又一男一女を得て一家和合団樂して幸福に日を送られつゝあることは全くてい子の至誠に報ひられたのであらうと思はれる。

三男永輔

永輔は明治六年六月同上宅に出生し、翌七年一月富小路御池上る所に移転し少年時代柳池小学校に入り卒業後家事並に商務に従事した。明治二十年刺繍品輸出業を開



始した時、将来洋学の必要を感じ英語を修めしめられたが、後同業を休止することゝなつたので、今後我営業の意匠図案に資するため、同二十二年菊地芳文画伯に入門して絵画を修めた。後東京支店販売事務に当り、同二十八年匿名合資組合に加入して、京都仕入係に転じ、同三十一年分家して、高田歌子を妻に娶つたが夫婦の間には子宝なく、同三十三年実兄善兵衛三男宗三郎を生後直後養嗣子として養育することゝなつた。明治三十五年関西方面に事業を拡張するに当り其主任となり、店員を督励して発展に努められた。同四十三年大阪に、同四十四年名古屋に支店を設くるの盛運となつた。後福岡、金沢、岡山、朝鮮に支店を置き、大連に出張所を設くる等関西部の大発展を現出するに至つた。氏資性類敏且勤勉にして、殊に製造に対する研究心は強く自ら工場に入り実験し其工程を知得し、却て工業者を指揮し又意匠の考察には一見識を有し、能く流行界の先駆となり華主の賞讃を得る等、今日我店の殷盛なる氏努力結晶の賜なりと云ふ

ことができる。尚社会に於ても信用篤く半衿商組合長、京都商工会議所議員、同刺繡同業組合長等に選任せられた。其頃京都時間と称して集会時刻を遅延する悪習があつたが、氏は之が改善を強調し、追日其実力が揚がつたので当局より賞詞を受けられた。昭和二年株式会社細田商店の創設に当り社長となり、社業をして益々発展大成を見るに至つたが、同十二年家兄の相続者善兵衛に社長の任を譲り、自分は取締役となり社務の監督に當られてゐるのである。曩に養嗣子宗三郎発病のため家兄の四男富三郎を養子とし、八木良久子を妻に娶り会社に勤務せしめられてゐる。其後幾分商務が閑散となつたので、柳池学区の学務委員其他公共各種の事に当り社会に貢献せられ、殊に老年に至り体旺盛健康で益々豊饒たるは慶賀に耐へない所である。

### 三女つね子

つね子は明治十八年一月富小路御池上る所で出生した。少年時代柳池小学に入り卒業後裁縫を習得しつゝあ

つたが、父は次女でい子の不遇に鑑み女子と雖ども独立自活の場合を考慮し置かねばならぬと、十五歳の頃竹内栖鳳画伯に入門して絵画を修得せしめられた。後家事を練習した。明治三十九年磯崎又吉を婿養子に迎へ分家して同四十三年細田合名会社創設の際社員に加り、大正四年二月東京に移住して同支店長に就任した。つね子は同七年十二月不幸病死したが、一男二女があつて家事整理に支障があるので、翌年十一月加藤きみ子を後妻に娶られたが、同女は前妻の遺児を能く勞り専心養育に勉められたので兒女は生母にも増して敬慕し一家藹々として円満に暮して居られることは、一族共の賞讃敬服してゐるのである。尚又吉は資性温厚で而も勤務嚴格であつた。店員には慈愛を以て訓戒指導して監督に努められ、又店員も敬慕して其任務に尽し業績発展の趨勢にあることは欣幸に耐へない。殊に大正十二年九月の関東地方大震災火災に當つては、自家を顧みず店内に踏止り、市内に自宅のある店員には直に帰宅せしめ、自ら商品帳簿等を整理

して店員と避難を共にし其統率に任じ、此大衝撃に際し幸ひ一人の負傷者もなく、其処置に敏活にして当を得たことは感激に堪へない。更に復興に當つては克く奮闘努力只管回復に勉められ、暫くにして元の盛況を見るに至つたことは多大の功績を認むるのである。氏は近来老境に入り支店長の任を退き監督に當つてゐられるが、至極健康の持主であるから、永く東京支店を援助せられむことを切望して止まないのである。

#### 季子孝三郎

孝三郎は明治二十二年十一月同上宅に出生。柳池小学校卒業後同三十二年高等小学校に入り、同三十五年卒業した。将来我營業に従事せしむる目的を以て梅村景山画伯に入門して絵画を専修せしめられた。齡十七歳の時翁の逝去せらるゝに當り、同人の前途は私に一任せられたので、爾後店務に従事せしめ、明治四十三年合名会社創設に當り社員に加へ、同年名古屋に支店を開設するに際し同店の主任となり能く勤勉努力して漸く業績の見るべ

きものあるに至つたが、予て感ずる所あつて、此際退社  
独立して輸出入業を開始の希望を申出たのであつた。

嘗て父は輸出を図り国富の増進に努むるは国民の義務  
であることを痛感し、曩に刺繍品の輸出を創められた事  
もあつた位で斯業は翁の素志にも副ふことであるから  
と、一族協議の上これを諾した。後創業中は種々困難に  
も遭遇したが、克く堅志力行して、電気材料品の製造  
と、同器具類の輸出を始め漸く経営の見込がついたの  
で、大正六年大阪市に一家を設け、江州細田家の縁戚な  
る岡田秀子を妻に娶つた。同十一年電灯線直輸入交渉の  
ため米國に渡航して、其製造法をも研究して帰朝後東京  
蒲田町に製造所を設け、同十四年營業の便宜上東京に移  
転して本店を置き、大阪を支店として益々營業の發展に  
勉め、更に東京其他数ヶ所に電球製造工場を設け、又中  
国上海並に泰國に支店を設置し、其外南洋各地に直輸出  
を開き漸次成功の域に進みつゝあることは、翁の素志報  
ゆることのできたので、洵に欣幸に堪へない所である。

猶将来堅実なる基礎の上に大成せらるゝことを冀ふて止  
まないのである。

## 遺稿

掟 明治十二年頃の選定せられしもの

一身の分限を弁へ不相応之品所持致間敷事

一商品は勿論傘下駄等に至る迄猥なる取扱致間敷事

一金銭は云ふに及ばず筆紙其外何品によらず大切に相心

得無益の費をなす間敷事

一遊興或は勝負に長じ又は戲言戲動に時間を費し家業を

怠る可からざる事

一酒色は身を誤る最第一実恐るべし、深く相慎み沈酒

荒淫す可からざる事

右之条々堅く可相守者也

自伝に叙する教 但行商図掛軸裏面記載

父円誉甥なる近江国神崎郡建部大塚村高村孫兵衛ぬし

に遺託あるにより安政元年寅の十二月備中国矢掛町の支店より同家に移り孫兵衛ぬしを父の如く仕へて万事差図に随ひ翌卯の正月資本金拾両を授与ありて懇に諭されければ其旨を奉じ小間物を売行す。しかるに虚弱にして重荷に堪へかたく半襟を仕入濃州に売行しけるが、漸く目当相立安政五年戊午の四月蒲生町日野麻生町の旧里を再興す。旧借を償ひしゆへ後また一策を起し慶応二年丙寅十月十五日此京師に一店を開き友仙仕入を産業とす。旧商は日野に譲りて古郷の相続とす夫起業の始めより積雪烈暑山川の厭ひなく危きを犯し苦を忍びて今聊此安きに至れり。子孫表文を篤と会得し一には信実を元として上品を掛引なく他に劣らぬよう下直に売り、二には身を惜まず人に害にならぬよう怠りなく稼ぐべし、三には行届くよう約やかにして、火難盗難飢饉病氣等の用意に歳々聊宛にても積立置くべし、資本過分なるはよろしからず井の底より登る念ひにて辛抱すべし。

明治十六年癸未一月 細田善兵衛誌之行年五十歳

灯火に譬へての誨

先考一雲翁は常に仏教を崇信し屢々禪師に就き教を受けられたが、或時禪師より燈火に譬喩する誨を授けられこれを記述せられしもの左の如し。但本文は掛軸に表装して家宝として保存してゐる。

ある人の教によき事をたとへていはゞ、一間のうちにて燈を一つともせば一つ明らけし、二つ三つと燈すに従ひ限なく光るがごとく心の鏡澄み渡りて天地の直なる氣移りてよきに向ふ。まして悪きことを思へば氣血濁りてめぐりあしく、よそより教ふとも移らずして益々悪きを是して、思はぬ禍ひの来れるなり。此理に感じ家訓に書遺し置くものなり。

ともし父も教ますことに照りわたり心は更にくもらざりけり

ひとつせは一つ曇りて末つひにこゝろの鏡さひはてにけり

天地の色かはらねとよしもあしも招きて植うる種にそ

有ける

奇蹟の恩寵

一雲翁壯年重病に罹り生死の境に立たれし時の感想を晚年自ら記されたるもの 但本文は帖に作り眠雲帖と題して大切に収蔵してゐる。

己若き頃胸膈の煩ひにて、湯の外達せられざりければ今は此時と心をさだめて、後の世の惑ひいかゞならんと、兼て志さず悟もはやと膝を組み眼を閉ぢ乱るゝ心を臍の輪に静め頓て朽ちなん穢らはしき身にしばしも心とゝむべきにあらず。唯々身を離れんのみと思ひなりぬる内にふと心の飛び出る如くおぼえけり。この時心は風なき隴夜の空を斜にあゆみ行くようにありけり。

来し道に帰る習ひの玉の緒をなとか繋きて行くかたそなき

猶身を顧みるにかゆきいたきはた出入の息もわかたず、己か身のやうにもおほえさりけり。今までは此身一

つに執着して心の苦しかりしをかへすゝも悔なげきて。

我身に朽ちぬるものを世の中の花にうかれてなに迷ひけむ

いかで仏にま見えてんと思ふまゝに黒衣の僧一人行あひけり、また通力を試んと不二山を望めば高根より三保の浦を見おろし、東は松島西は対馬の果までも隈なく見えにけり。本の身に復りつれば今までふさがりし胸ひらきて食も進みて今なほ健なり。

身と心わかちかたきを分ちなはこゝろの君はたのしかるらむ

長寿のことを 但眠雲帖併記

草も木も根に元気を含みて枝葉榮え花ひらき実を結び亦根に帰る是生の終りなり。人も臍は身の根なればこゝろを臍の輪に納めれば元氣腹部に充ちて寿量る呼吸さへ山の如く豊なり。新しきを入れ古きを毛孔より除出す。

若し元氣のみたざれば呼吸乱れて早きなり。美味と温袍はなか／＼に身を損ふもとひなり。食を節にして天地に任せて相応しき運動をなさは其身は風に瓢游する如く軽くして震雷にも驚かず、暑さ寒さにも侵されず、筋骨堅く眼鼻だにも衰へず、舌なめらかにして、味ふことに甘く起臥安らかに気血めぐりて面の色麗しからん。扱五十歳にも至りなば思ひは色々なれど、自ら食気たりて消和の程こそ安からね。四十歳頃より飲食愛欲を慎まば身を終るまで健かならむ。

歌集抜萃

元旦

一歳をことなく越へて更にまたことしもかなと祝ひこそすれ

新年祝

一年のかはりもしらす更に猶としを迎ふそ嬉しかりける

新年はいつくもなへて長閑なり老の波さへわか／＼へりつゝ

同店の栄ゆるを

誠もて売かふまゝに新玉の年毎にこそたちさかえけれ年々にひさけるものゝ弥まして誠は世にもあらはれにけり

年々に栄えゆきぬと聞しより立舞ふはかり嬉しかりけり

たゆみなく皆かつとめし根さしより千々の黄金の花や咲くらむ

商人

あまれるをともしき方に運ひつゝ世のためにこそ勤むへきなり

重荷を負ふて遠き路を行くことを

怠らす勤めはことの成るへきにしひてとおのか身を痛めけむ

兄弟の和親をよるこひて

姫小松色をみたさす立ならひみさをくかへす千代やへぬらむ

故郷夢

まどろむと思はされとも昔しわか住し里わの夢をこそ見ぬ

往時如夢

すきしこと思ひ出しぬる夜半こそはうつゝもつひに夢となりぬる

京都に住しより三十余年不幸なく一家の睦し

きを

細き道を辿りし甲斐や立ならふ小松か原に今日も遊はむ

信州善光寺に詣てし時に

み仏の深き誓ひに誘はれて胸のほのふも消え果てにけり

耳に聞き眼に見ることもよそにして法の教そたふとかりける

知恩院廟前の石階改修を發起せし時に

諸人の登りくたりを助くるもやかて仏のちかひなるらむ

釈尊は人を善事に導かんとて

人々のかはるこゝろの闇路をは法にみちひく経のかす

悪しき事をたくめはかくと聞きたにもあな恐ろしの鬼の面かけ

唯我独尊

一もとの梅の実をもならふれはとりくかはる世にそ有ける

一連託生

我ことの好になつます人の身にいと悦はしくなすにあらむ

念仏

しはし間も身には心を迷はしと唯御名のみを唱へこそすれ

愚ゆゑ教の道にまよふなりたゝひたふるに弥陀にまか

せん

心をも身をもはなれん一筋に助けたまへとゝなへこそ

すれ

妙法

かぎりなき妙なる法を聞しよりはちすの花はこゝろに

そさく

諸行無常

夜の間もかはりてそゆく谷川の水にひとしきわか身な

るらむ

時くれば常なき風にちりぬへし実はえより咲花の身な

れは

是生滅法

たちちねのなきそのもとを思ひなは心もつちに帰るへ

きかな

雨風にまかねも錆ひて朽ぬへし石もやきなは灰とこそ

なれ

生滅々已

みよしのゝ吉野の山も冬されはいつこを花とゝふひと

もなし

友と思ふかけ樋の水も氷りけりたゝこからの音のみ

にして

寂滅已樂

目に見えず手にもとられぬ風のこと空しきこそ誠をは

知れ

草や木とおなし心と思ひなは法のおしへの月を見るか

な

色即是空

みよしのゝ山のことろは知らずして匂へる花にうかれ

こそすれ

身の上のよしあしはみな夢をかしうつりゆく世に心な

とめそ

本来無東西

天地のひとつ恵みにあらはれて柳はみとり花はくれな



井

世の中の片手の声に迷よふなよ秋の千草の花のかす

く

迷故三界城

つひにゆく後も我そと迷ふらん燈すあかりの末しらす

して

我ありと思ふ心の迷ひよりあはれ世の中住むかひそなき

翻迷了解

また聞かぬまた見ぬ前とおもひなは心にかゝることや

なからん

おのつから我と思ひし雲はれて今宵さやけき月を見る

かな

不老不死

身をすては老せず死せずはかりなく蓬か嶋の心地こそ

すれ

悉皆成仏

かけにさへ人をいたはる心もてともに浮へる道そあり

ける

彼岸

たゆみなく右も左も目をふれすかのきしゆけは蓮葉の

池

貪慾

落ちゆくを昇るとのみや思ふらんさしも哀れの深き淵

哉

愚痴

我と思ふ心のかゝみ曇るより世のことはりはうつらさ

りけり

嗔恚

山の井を急ぎて汲めるころよりわき出る水も濁りこ

そすれ

観真如月

おのつから我そとおもふ雲はれて今宵心の月を見るか

な

見れとも見えす聞けともきこえずといふこと  
を

思ひつめし風の強さの裏波に松のしらへもきこえさり  
けり

見ざるきか猿いはさるといふことを

見ては溺れきゝてはいかり一筋にわれの思ひをいひつ  
のるかな

念起是病不繼是薬といふことを

ふき渡る風もかよはぬ常磐木は志つ枝々と枯れはてに  
けり

常といふことを

つねくゝに五つの常をつねとして守らはつねの人とな  
るらむ

約やかといふことを

身を軽くつゝましくしてかせきなほ老ての後は豊かな  
るらん

仁

かけとなり日向となりて世の中の人をあはれむ人そた  
ふとき

義

身につめてなすへき道を守りなは後の世までも名こそ  
残れり

礼

和やかに忍ふるものと慎めは人の言葉もしつけかるら  
む

智

いつまでも学ひ始めし心にてまなはゝ終に智恵やます  
らむ

信

しとやかに身のなりふりをとゝのへて人の身の上思ふ  
へきかな

不動明王

胸のうちに燃ゆるほのふを静めけん心のつるき振かさ  
しつゝ

文珠菩薩(參)

学ひなは世のことはりも明らけく心の玉にひかります  
らむ

地藏菩薩

臍の輪に心の玉を蔵めおかは世のうきふしは知らて行  
らん

起上り小法師

よきにおほれ悪しきをうしと沈みしを捨て起上る姿成  
らむ

人は死しても名をとくむといふことを

老ひぬれはすえそ短かき後の世に残るは人を恵くむへ  
きは

世の流行になつむことを

世の中に移る心の迷ひよりあしき道にもなつみけるか  
な

世の中の流れになつむ人の身はこゝろまよへる姿なる  
らむ

高慢の人を見て子孫の誠とする

高ふらす人目かさらす身を軽く心素直に世を渡れかし  
無益の殺生せし人に災の来れるを見て

釣の糸に妻やわか子もつなかれてならくに沈む親の哀  
れさ

節分の鬼やらひを見て

ほしや惜しと思ふほこりをなやらひて我身も今はさや  
けかりけり

歳暮の文を給はりし時に

我物と思へはけにも年波のしふきにむせふことそいと  
ほし

折にふれて

天地の色かはらねとよしもあしも招きて受る種にこそ  
あれ

降り積る雪にしはしたはむともやかても起る庭のく  
れ竹

天地の直くなる心うけたればまかりては世を渡るへき

かは

雨水の濁りに生うる浮草を我家となして虫やすむらん  
濁り井の澄みゆくまゝに水底にちりし紅葉の錦さへ見

ゆ

述懐

さし出てことしり顔に語らまし人のいふせく思ふ老の

身

老ひぬれは命毛なかき筆とりて思ふ言の葉かくそたの

しき

古へは我住なれし里なれと知る人もなくかはりけるか

な

老ひぬれは動く手足のうつろひて思へるまゝに運はさ

りけり

たゆみなく磨けと我は曇れるを浦山しくも光る玉かな

不生不滅に寄せて一雲と号せしことを

うき雲にひとしき身をは有と思ひなきと定むも迷ひ成

らん

辞世

終にゆく道は夜ことの習ひなり散りぬる玉は雲にひと  
しき

遺芳

先考一雲翁の業績と人格を讀へ我細田家の事業を世に  
紹介下さつた新聞や書物は相当に多い。これ等紙上に現  
はれた記事は先考及我等一家一族の上に寄せられた多大  
の同情であつて、過褒の辞固より当る所ではなく私共の  
心中おのつから忸怩たるを免れないのであるが、折角の  
御厚情を没するのも遺憾と思ひ先考及一家一族の遺芳と  
して子孫に伝へ、その喜を頒つべく茲に転載することゝ  
した。これ等の書名と新聞は左の如くである。

近江商人伝記 大阪毎日新聞

東京時事新報 滋賀県人物史

日野町誌 近江商人事績写真帖

近江商人伝記所載

明治四十五年十一月滋賀県蒲生郡八幡町県立商業学校  
創立二十五周年記念発行近江商人伝記 但六十七名之  
内

### 細田善兵衛の事

富みて貧しきを忘れず、富みて驕ること無きは固より  
可なり。而も未だ富みて礼を好む者の最も可なるに若か  
ざるなり。細田善兵衛の如きは其可なる者の一人と謂ふ  
べきか。善兵衛は蒲生郡日野町細田勘左衛門の二男な  
り。天保五年三月二十日を以て生れ幼名善吉といひ長し  
て善兵衛と称す。家代々綿商にして屋号を和田屋といひ  
しが、後質商に転業し備中国小田郡矢掛町に出店せり。  
善兵衛十六歳の時父病に罹り歿す。然るに長男祐五郎は  
中年父に先だちて歿せしかば養子六藏家を継げり。不幸  
にして災害存に臻り、家計漸く困難に陥り前途頗る暗慘  
たるに至りしかば、善兵衛は従兄神崎郡大塚村高村孫兵  
衛方に寄食することとなり、安政元年十二月矢掛町の出  
店より高村方へ引移りたり。高村は常に善兵衛を誠むる

に細田家再興の事を以てし、万事懇切に世話しければ善  
兵衛は高村を師父の如く敬ひ、仮にも其指揮命令に違背  
することなかりき。翌年正月資金拾両を授け尾濃勢三州  
に赴きて半襟の行商を始めたり。身は質商の家に生育し  
荷担に任へされども強忍して天秤棒を肩にし、一日能く  
数里の間を駈け廻り寒暑風雪を避けず、艱難辛酸を厭は  
ず、勤勉業に服し節儉身を持せしこと尋常商人等の能く  
及ぶ所にあらず。例へば草鞋の如きも其価の廉なる土地  
に至れば、一時に数足を買求めて売荷の上に付加し置き、  
途中草鞋の破れたる時は、其破れたる片足のみを取換ふ  
るを常とし、旅宿は予て安価にして深切なる宿を選び置  
き、仮令或一駅にて己に晩景になるも若其宿が不廉なれ  
ば夜を冒しても次の駅に到り、予選し置ける旅宿(宿)に迫し  
昼食小憩等も敢て旅亭茶店に入らず、並木の下に菅笠を  
置き腰を卸して団飯を喫し小憩をなす等一身の便利を犠  
牲とし、可及の旅費を節減し日々早く出で晩く帰り売售  
の多きを業として、労苦の身にあるを知らず。細田家再

興を志願成就せんことを図り多年一日の如くなりしかば、世の信用を得て華主到る処に増加し今や前途の光明を認むるに至れり。烏兔勿々家政も五年と改まり、善兵衛早くも二十五歳の春を迎へしかば、其年四月高村方を辞し、故郷日野町に帰り旧来の商業を廃し半衿の行商を営み義兄六蔵と共同して業を励みしに、頗る発達して数年の間に資産大に増殖し、茲に細田家再興の志願を成就せり。因て半衿商は全く義兄に譲りて細田家の経営を一任し、自は京都に移住して、更に友仙染呉服商を創めぬ。実に慶応二年十月なり。爾來商勢駸々として発展し、明治十七年東京に半衿卸商を開き、同十九年同地に支店を設け又大阪に拡張し、同二十四年五十八歳にして家名を長子に譲り兄弟五人をして協同事業を経営せしめ、退隠して名を善輔と改め一雲と号す。其後専ら仏教に帰依し傍ら和歌を修め優遊自適すること十余年にして、明治三十八年四月七十二歳にして歿す。店舗は富小路通御池上の守山町にあり。

善兵衛幼にして慧敏強識其師に従学するや、一を聞きて二を識り書を読むにも一回の句読を受くれば直に能く之を諳じ、他児に在りては一月を要する課業も僅に一句にして修了し師をして常に嘆賞せしめたり。又平生虚言を吐かず面従後言せず直言に過ぎて却て人の忌諱に触れること時々之れ有きとぞ。又嘗て明治の初年金貨と紙幣と其價格非常の差を生し将来如何の狀態に至るや測り知る能はざる趨勢にありし時、亡父の旧債年賦返弁の残額猶若干ありしに善兵衛思ふやう、這はもと正価にて借用せしものなれば、正価を以て償還せざるべからず。されども今日の趨勢にては将来正価を以て償還せんこと極めて困難なるべし。年賦のことたる初めより然るにあらず。手許不如意のため己を得ず債主に懇願し、債主も亦己を得ず承諾せらるゝものなれば、出来得る限り早く皆済するを適當とす。殊に将来紙幣にて償却し債主をして損耗を受けしむる如きは吾か最も忍びざる所なり。此際不用の家具を売却すとも正価を以て速に償還するに如か

すと、遂に未済の金額に礼物を添へて債主の許に詣り厚

より贈られたるを見て、

く永年の恩誼を謝して返金し、且つ詳に其意中を告げた  
るに、債主は其律義潔白なるに感じ、従来多くの人々に  
金融しつれど、貴公の如き未だ曾て有らずとて大に賞揚

富めるとも貧しきを忘るゝ勿れといふ古き教を忘れ  
ざるを、此前大阪の毎日の言の葉に載せてこの敷島  
の広き大和に告げるに訝しく思ひしに、此度遠き東  
の都にも響きは守らぬ人の多からむ。

したりとぞ。善兵衛嘗て子孫の奢侈に流れんことを慮  
り、画工をして己が荷物を肩にし行商する図を描かしめ、  
之を座間に掲げ時々子孫に示して誠しむる所あり。又

海山の暑さ寒さの身にしみしこと忘れぬこゝろよ  
りして  
又忘るゝ人に

飲食物は滋養を主として之を用ひ決して美食せず過食せ  
ず、総て天地の恵によりて生育したるものなりとて之を  
大切にし一滴の残醬一粒の残飯も徒に投棄するが如きは

たらちねの親の恵のうきを知らておのか袴に身を埋  
むらん

深く之を慎みたりといふ。京都日出、大阪毎日、東京中  
外商業等の諸新聞紙に実業家言行録と題して其性行を賞  
揚し、常に善兵衛に親炙せし人々は其言行一致能く徳を

嗚呼窮苦の余を承けて家道を再興し、其成功を義兄に  
譲りて己別に一家を立て又能く巨万の富を贏ち富て貧し  
きを忘れず、富て驕ること無く且其行為一々礼に合へ

修め義を重んじ業務を勉勵し子弟の教育に熱心なるを感  
歎せざるものなし。善兵衛己のが性行を報じたる、東京  
中外商業新報を見て、同新聞に寄せたる歌に、

斯人豈独り商業家の龜鑑たるのみならんや。

明治二十八年発行貴社の商業新報第四千九十四号を他

細田合名会社

大正四年十一月七日発行大阪毎日新聞所載

御大典記念博覧会工業館第二部染織工業品の半衿の出

品は其数実に多大のもので、一見如何なるものであるか判別し難い中にも一際目立つのが、細田合名会社出陳の金紗縮緬に菊の刺繡外一掛は勿論御大典を記念すべきもので、婦人などは何れも足をこゝに停めてイーデスネの語を残して行く。

出品者細田合名会社は現時半衿界の霸王と称へられ、斯界に雄飛し、古く関東より今や関西方面に手を染め実に素晴しい成功を贏ち得たものだが、其内容を紹介するに当つては先代主故細田善兵衛翁が苦心の存する賜である事を略記せねばならぬ。翁は江州蒲生郡日野町の人、慶応二年十月意を決して京都に出で東京に半衿業を起すこととなりしも、元より多大の資本あるにあらず、子が蚊になる迄の浮き沈みよりも更に甚しき苦楚艱難を嘗め、しかも七十有二の高齢に及ぶも勤勉努力勇往邁進能く近江商人の賦性を發揮して、一代にして克く巨万の富を築き得たるこそ、真に我商界の一偉人実業家の好典型

を謂はねはならぬ。

斯くして善兵衛翁は今を去る十余年前辞世するに及んで、其令息儀三郎氏即ち現社長善兵衛を襲名と共に業務一切を承継す。当時巨万の富を有して居たといへ時代の變遷と半衿界は著しく進歩して傍々改良を促され、在来の營業方針にては亦も一大抱負を貫徹せしむる能はざるのみならず、先代の遺業をして大に發展せしむべき重任あれば、爾来着々内外の業務に改善を加へ、明治四十三年五月細田一系を以て事業一切を法人組織となし、茲に細田合名会社を設立し、社長に善兵衛を推し、社員に永輔、善三郎、又吉の三氏就任し、以下店員百二十余名直営工場のみにも職工二百余名を使役し、製品は半衿を主とし其他帯揚、腰帶、染帶側、裾除、兵児帶、美人紐等にして、何れも直接機業場七ヶ所に染工場四ヶ所を有し、一面左の枢要地に支店及出張店を置き相呼応して業務の發展を期している。

京都市富小路通御池上る

細田合名会社本店



東京市日本橋区田所町 同 東京支店

大阪市東区南本町三丁目 同 大阪支店

横浜市真砂町四丁目 同 横浜出張店

名古屋市鉄砲町三丁目 同 名古屋支店

にて、就中東京支店は古く明治十九年の設立に係るもの。

当時商品の多くが殆ど東京向き専門のものなりしに依るも、更に明治四十三年六月大阪に支店を新設して、関

西方面にも拡張をなし、販路は東京其他の三越を始め今や全国到らざるなき勢力を有す。

然して茲に特筆すべきは直営工場にして、先づ機業場を既に十ヶ年前頃より左記の数ヶ所と染工場を有せり。

縮緬地 丹後国与謝郡三河内村に 三ヶ所

同 加悦村に 一ヶ所

同 岩屋村に 一ヶ所

組織物地 群馬県山田郡毛里田村に 一ヶ所

同 山田村に 一ヶ所

染工場 京都市高倉通御池上る柂町

同 油小路通富小路東入橋町

同 白川通三条下る梅宮町

東京府亀戸町（毛斯綸専門）

に有し、就中柂町工場は七馬力半の電動力を据付け一分間によく十二石を揚水し、これを巾五尺長さ四十尺を三段に分割せる人造河川に送水して水洗し、電動力の脱水

機により乾燥せしむる等の新設備は他に多く其類を見ず。且本店内には既に二十年前より意匠圖案室を設け専

門家数名を聘し半衿圖案の募集をなし、常に斬新奇抜の製品を産出すべく心血を注いでゐるのみならず、善兵

衛、永輔の両氏は有名なる画伯の高弟にて半衿圖案等に関する造詣最も深き点など大に誇るべき処である。

大正五年九月二十四日発行東京時事新報所載

半襟界の白眉細田合名会社

独り京都のみと謂はず、半衿業界の第一人者は京都市

富小路通御池上るに本店を有する細田合名会社社である。

同社の前身は日野善と称した個人経営で、安政年間先代善兵衛氏が、江州日野町より半衿業を初め、伊勢、美濃、尾張方面に持下りをしたに端を發し、慶応二年御幸町四条下るに移住し、後高倉御池下るに移転し、更に明治七年現所に店舗を設け、関東方面に販路を拡張すると同時に東京日本橋区田所町に支店を設けたり。

意匠と図案に留意し、熱心に奮励の結果、商勢は頓に發展し今日の基礎はなつたのである。後更に大阪市東区安土町三丁目と名古屋市鉄砲町三丁目及び横浜市真砂町四丁目に出張所を設け、明治四十三年には組織を変更し、資本金拾万円の合名会社となし、細田善兵衛、同永輔、同善三郎、同又吉の四氏が業務担当社員となり、善兵衛氏之れが社長に就かれた。営業部を仕入販売に分ち、社員と店員は協力して事業を励精し、更に明治四十四年京都本店を改築拡張した。

商品の選択に重きを置き、市内数ヶ所に加工及び仕上げ工場を設け実力と教養ある意匠図案を招聘しては意匠

図案に技術に注意し斬新優美なる精良品を提供してゐる。されば細田の製品と云へば絶対の信用を置かれてゐる。従つて細田の半衿は流行界を制するの勢があつて、東京方面に於ける同店の勢力は強く根を植えてゐる。京都の製品として嘖々と伝称されてゐる。

社長細田善兵衛氏は頭腦緻密、人に対する謙抑にして礼義厚く家憲に遵ひて一店一家の模範となり、店内の規律も亦厳正にして一糸も紊れてゐない。永輔氏も着実温厚の人たるとともに勤勉且つ敏腕の人である。上に立つ之等の人々が相俟つて店員を督励し熱心であるだけに家業は益々張り販路も日に拡張せらる。如今流行界の氣運は日に推移し、意匠図案に技術に染色に注意せなければならぬ時、同店がこの趨勢に應じて流行界を制しつゝある壯観は拔群であると云はねばならぬ。

大正八年十二月発行現代滋賀県人物史所載

半襟服装品卸商細田合名会社々長細田善兵衛

成功の径路は自主自助に始り、忍耐勤勉秩序儉素に申し誠実無妄に終る古へよりして同じく然り。先代細田善兵衛翁は天保五年三月二十日を以て蒲生郡日野麻生町に生る。幼字は善吉と云ひ、細田勘左衛門次男（附脱之）なり。其家世々綿商を営み、綿屋若しくば和田屋と曰ひ財力を以て郷里に雄たり。然るに父勘左衛門に及び家道漸く衰へ、千波万波層々洶湧形勢非にして頽厦支へず。加之其間先づ兄を喪ひ尋で復父を喪ひ具に世路の辛酸を嘗む。二十一歳従兄高村孫兵衛氏に寄食し、翌安政二年正月資金拾兩を同氏に得て自ら蒲柳の質に鞭ち、尾濃勢三州に往來し、水を涉り山を攀ぢ風に櫛り雨に沐して、小間物を行商し後半衿に転じ遂に大方の信用を博し、羽翼漸く成るに及び独立自営の計を立て主家を辞して郷に帰り、義兄六藏氏と其業を共営す。未だ幾許ならず、更に飛躍一番して慶応二年十月十五日京都に移住し、友禪呉服商を創め号して日野屋と曰ひ忍耐勤勉を経とし秩序儉素を緯とし令聞忽ち布いて華客雲集し以て能く陶朱の富を致し、

暮年隱退して名を善輔と改め又一雲と号し、神を敬し仏に賽し傍ら風流韻事に親み明治三十八年家に歿す。享年七十有二。人皆嘖々の遺徳を称す。当善兵衛は翁の長男なり。慶応三年八月を以て京都に生る。幼字を儀三郎と曰ふ。七歳にして小学校に入り十三歳の時同市の画伯幸野楳嶺君に師事し、精思覃力寸陰を愛惜し其技日に新に精勵の効空しからず。未だ三年ならずして早くも既に蘊奥を究め濟輩能く其右に出づるなし。人皆以て異数となす。蓋し君の宿志たる他日大に斯技を以て家業に応用せんとするに在り。十六歳にして丁稚となり、敵君指導の下に商務に缺掌し深く会得する所あり。其後専ら半衿圖案意匠の事に当り満腔の蘊蓄を傾倒して独擅の長技を縦横に發揮し常に時好に先駆して顧客の注目を喚起せしかば、販路自ら拡大し店運弥發展し、果して曾年学ぶ所の極め有利なる準備的投資法たりし所以を立証するに至れり。十八歳より屢々東京支店に臨監し、明治二十四年家督を相続し先代名を襲ぎ儀三郎を改め善兵衛と称す。時

に年正に二十有五。爾來鉄腸石心誠実にして勤勉深慮にして敢為、専ら正徑に由つて世に立たんことを期し毫も投機其他世俗の風塵に染まず、行路純潔宛も溪間の清水一点の汚塵を浮かべざるが如く、啻に先業を失墜せざるのみならず、却て益々家聲を發揚し、明治四十二年大阪に支店を開設し、又同四十三年五月を以て令弟永輔、令甥善三郎、義弟又吉の三氏と共に細田合名会社を組織し、本店を京都市富小路御池上るに択み専ら半衿並に服装用品製造販売を営業とす。而して君其社長として全般の経営を統轄せり。更に進んで同三十七年横浜に出張店を開き四十四年復た名古屋市に出張店を置く。而して又丹後及び上野の二州に機業工場を有し、京都及び東京の二市に友仙並に絞り工場を置き、其現に雇用する所のもの本社兩支店兩出張店を通じ、店員百四五十名二州兩市の各種工場を通じ男女職工数百名を算せり。益んなりと謂つべし。大正十年恰も開業五十年に相当せるを以て五十の數に因み先代桑梓たる江州一円及び現住する京都府

下の神社仏閣並に慈善団体五十ヶ所を択み多大の金匁を寄進し、尚又本社所在区内の小学校に対し若干の寄付せりと云ふ。商界の一雅話たるを失はず。君人となり寛平人と交りて城府を設けず、居恒別に嗜好する所なく、自ら奉ずる極めて薄く二六時中共に親むを以て唯一の任務とし娛樂とせり。其意蓋し以為らく人類は働かんため此世に生れたり、人生の意義に価値あるは其能く働くが故を以てなりと。而も君は致富を以て人生成功の目的と誤解する輕薄流にあらずして、清貧にして自ら潔やふするの、清富にして人を益し世を益すの勝れるに若かざるを熟知し則人生成功の手段として、正徑に由りて其富を致し、正徑に由りて其富を勉し、正徑に由りて其富を用ひんとするものなり。目下數多の慈善団体に干与し賛襄の功極めて多しとなり。君尚ほ頗る春秋に富み前途多望其技益々伸び其葉弥々茂りて將に底止する所を知らざらんとす。是豈独り君の幸ひのみならんや。

近江商人事績写真帖上巻第一六四回所載

昭和三年十一月 今上陛下御大禮記念之為滋賀  
県経済協会主催之編纂に係る細田善兵衛(初代)  
半襟行商の像写真登載記事

細田善兵衛は蒲生郡の人で幼名善吉と言ひ退隱後善輔と称し又一雲と号した。家代々綿商であつたが、後質商に転じ、更に備中国矢掛町に出店した。十六歳の時父歿

し長男祐五郎も早世し、災害荐りに至りて家計凋落のため善兵衛は安政元年十二月従兄神崎郡大塚村高村孫兵衛に寄食する身となりたる所、孫兵衛は常に善兵衛を導き、且戒むるに祖家再興の事を以てした。翌年正月善兵衛金拾兩を借りて尾濃勢三州に半衿地行商を始め、艱難に堪へ儉素を守り郊外の清流に渴を治し野頭樹下に握飯を食し、破鞋は片足づゝ破るゝに従ひ換へ用ふる事として旅費を節約し、常に細心の注意を以て行商したるため信用年と共に高く再興の兆稍見ゆるに至り、安政五年四月齡二十五高村氏を辞し、日野町に帰りて義兄と共に半

衿地行商に努力して、巨利を得た。慶応二年半衿商を義兄に譲り、己は京都に移住して友仙染呉服商を創めし所、商勢駸々として發展し、明治十七年東京に半衿地卸商を開き、同十九年東京に支店を設け、一方大阪方面にも業務を拡張し旭日昇天の向上をなした。同二十四年家を嫡子に譲り五男子協力して同業に当り家運益々繁栄して居る。

昭和五年十二月発行近江日野町誌所載

初代細田善兵衛は麻生町の人なり。天保五年三月生る。安政二年半衿行商を創め諸國に活動せしが、慶応二年十月遂に京都に移住し同業を継統す。明治十七年東京に半衿地卸業を始め、同十九年日本橋区葺屋町に支店を設け営業頓に發展す。同二十四年家を子息に譲り三十八年京都に歿す。二代善兵衛初め儀三郎と称す。父の譲りを受け家名善兵衛を襲ふ。明治三十七年横浜市真砂町に出張店を置き、同四十三年大阪市東区安土町に支店を設

置し、同年一族を以て細田合名会社を設立し、本店を京都市富小路通御池上る守山町に置き社長となり、同年自宅を富小路通二条下る俵屋町に設く。業務愈々発展し、同四十四年名古屋市東区宮町に支店を設け、大正十二年には北海道札幌市南二条及仙台市東一番町に支店を開設し、同十三年京都市室町蛸薬師下るに支店を置き、翌十四年には福岡市博多土居片町及高崎市鞆町に支店を設け、恰も東は北海道より西は九州に至る各地に支店を置き、蜘蛛の網を張りし如く組織的に店舗を設置し利益を各所に獲得し大成したり。茲に昭和二年一族及店員を以て株式会社を組織し營業一切を継承し、永輔社長となり善兵衛は相談役となる。安政以来二世にして斯の如き商運を開きたる幸運児善兵衛は更に合名会社保善事業を創立し自ら社長となり社会の為に寄与しつゝあり。現代日野町商人の模範とすべし。

## 遺業

### 細田株式会社の現状

我細田商店は、明治二十八年先考一雲翁が一家将来の基礎を鞏固にせん為め、一族合資共同の制を定められて以来、一族皆其趣旨を遵守し、奮励努力益々事業の進展を見るに至つた。明治四十三年曩の共同營業の制に則り、一族五名の出資を以て合名会社を組織して、私は社長となつて父業の拡張に務めたが爾來營業は弥盛大となつたので、支店を増設し店員も次第に倍加するの隆運となつた。昭和二年私は還暦の齡を迎へ、この機会に株式会社を創立し業務を継承して、弟永輔を社長に任じ、私は相談役となり、社員並に従業者に株式を分与して共存共榮の方針を樹立した。尚合名会社は保善事業に専属して私は其代表社員に任じた。昭和十年私は古稀の齡となつたので退隠して勘左衛門と改名し、長男真治郎が相続して善兵衛を襲名した。当時一族並に会社の現状を列記すれば左の如くである。

一 店舗 京都本店及京都西店、東京、大阪、名古屋

屋、福岡、岡山、仙台、金沢、横浜、高

崎、北海道、朝鮮京城の十三ヶ所外に大連

市に出張所を置く

一 一族 本家及分家合計十名

一 店員 三百五十余名内別家通勤者三十余名

外に織機、友仙染、刺繡工場等数ヶ所

以上の成績により当時同業者中の白眉と称せらるゝに

至つた。尚昭和十四年別家時一百名を算し、内四十名は

現在我店に勤務して既に三十年以上の勤続者数名あり。

又十六名は独立営業を始め何れも相応の成績を取めてあ

る。先考は創業当時より利は元ありとの格言を尊信し

て総て製造に重きを置かれ、私等も少年の頃から半商半

職の修業を積み、従つて店員の養成に当つても常に製造

力の蘊蓄を培ふことに心懸けたので、独立就業に際して

此素養を発揮し漸次成功を見るに至つたのである。是等

は先考の賢明なる先見と周到なる薰陶の資に外ならざる

を憶ふて常に感謝に堪へない所である。

私は先考が晩年国風を嗜まれたるに倣ひて、近頃閑暇

を得たので和歌の練習を始め、茲に感想の腰折を記すこ

とゝした。

父の訓を守りて年毎に家業の榮ゆるをよろこ

ひて

たらちねの教にやからいそしみて榮ゆる家そうれしか

りける

祖先のをしへをかしくこみて

とほつ親の厚き教を守りつゝ子らよつとめを怠るなゆ

め

古稀になれる年に

やから皆さかえゆくこそ嬉しけれ世にも稀なる齡かさ

ねて

七十路を夢とすき来てかへり見る拙なきあとの恥しき

かな

日出会員（別家者の会名）百名にみちたるを

喜ひて

我店に日の出の光さしそひて百にみちたるかけそめて  
たき

先妣美津子刀自小伝

細田美津子刀自は、天保十四年癸卯十一月二十四日近  
江国蒲生郡日野麻生町父六蔵母ぬい子の長女に生れた。  
嘉永二年家政整理のため日野町宅を閉鎖せられ、齡七歳  
で祖母並に父母と共に備中国小田郡矢掛町の支店に移住  
し、学業裁縫等を同所に於て学んだ。安政五年廃業して  
同支店を引払ひ日野町旧宅に帰り、翌安政六年齡十七歳  
で翁と結婚せられたが、安政七年翁眼疾に罹り終に左眼  
を失明せらるゝに至つた。其間昼夜看護に勉められたけ  
れども其甲斐がなかつのは遺憾の極みであつた。然れど  
もこの間能く翁を慰藉激励せられ傍人をして感嘆せしめ  
たのである。

文久二年長男勝治郎、元治元年長女いと出生し、慶応二

年京都に半衿地仕入店を設けるゝに当り、二児を携帯移  
住せられた。元来日野町の宅は相当旧家で建物も狭少で  
なかつた上に、翁の家族増加に依つて別に一棟を増築せ  
られ手広くなつたが、長男勝治郎移住に際し、京都は広  
大にして立派なる都会であるところから、これに移住す  
ることは極めて幸福なりと慰撫的に物語られつゝあつた  
が、該仕入店は立入伊兵衛君の借家で甚手狭の陋屋であ  
つたので、勝治郎は案に相違の小屋を見せつけられて、  
京都は思ひ外狭き所であると落胆したといふ挿話もあつ  
たほどである。

翌慶応三年四月勝治郎夭折し、これも移住の支障から  
起つたことであらふと甚悲歎せられてゐた折柄、同年八  
月次男儀三郎の出生によつて聊慰められたけれども、殊  
に矮屋であり盛夏の身重より分娩等で随分困苦を嘗めら  
れた物語がある。又付近に知己者もなく日々の不便尠な  
からず、其心勞察するに余りがある。猶家事用器具類に  
至つては、小許の手廻り品を携帯せられたばかりで不自



由であつたので、毎日の冗費を省き又娯楽等は一切需めず、必需品の購入と家具の充実を唯一の樂として能く節儉を努力せられたのである。尚又物置場狹隘のため二階の一部に沢庵の漬込をなす等の不便を忍び儉約に努められたのであつた。翌年高倉通御池下る所に移転せられ、場所も少し広くなつたので麴を自製して味噌を造り、其他日用品は原料を買入自ら調製して其低価を図り諸事の失費を省き一意資産の増殖を計られたのであつた。

明治二年翁は過勞等のためか重性なる胃病発り飲食物も納まらず、一時危篤の状に陥られたが、当所に移住後日猶浅く未だ親身に相談する相手もなく刀自の心痛察するに余りがあつた。此際は神仏に縋るの外なしと只管祈念を籠め昼夜を分たず寢食を忘れて看護に努められ、又翁は禅学を研鑽体得せられてより、漸次回復に向はれしは、刀自の至誠が神仏に通し加護を蒙られしに外ならずと夫妻と共に大に感謝せられたのであつた。

明治八年藍染業の失敗によつて、多額の損失を醸し当

時は営業の継続も至難の状態となり、一時は京都を引払ふて江州に帰郷せんとの意向を起されたが、刀自は翁を激励して家政の改革を断行し、手代数名を解雇して丁稚のみを残し、又下婢を廃して刀自は専ら炊事に当り経費を節約し、尚店務を助成して一意回復に力められ漸く難関を突破し得らるゝに至つた。

然るに長女いとと次男儀三郎は生来蒲柳の質で時々病魔に犯されたので、常に医薬按摩針灸食養等に注意を払ひ日夜手を尽されたことは、私共は子として実に感謝に堪へない所である。其他子女の教養に尽瘁せられ厚き慈愛の賜により、我等兄弟に一人の不心得者もなく、一家和合円満裡に成長せし事は誠に感激に耐へないのである。後ち家庭の収入も豊かになり経済上何等顧慮する要なきに至つたけれども、以前困苦の時代を忘るゝことなく家事の外店を援助せられ、殊に我店の華主なる紅定、田附両商店から毎年大広縮緬を以て裾模様付着尺の悉皆染を依託せらるゝの例であつたが、これが裁断には刀自

の最も周到なる注意を払はれ、常に予定より若干數量を余分に造り出すことが出来、これを全部納付せられたゝめ、同店は厚くこれを謝せられた。其他端縫画付に至る迄全部刀自の手で行はれたのであつた。

翁は勤儉廉直の質で一徹短慮の嫌ひがあり、召遣ひの者は自然恐怖の念に打たれ萎縮する有様であつた。刀自は其間に処し、常に温情を以て慰撫指導せられたので、雇人等は刀自を慈母の如く信頼服従し永く勤続したる者の多かつたことは全く刀自の内助の功によるものである。翁は昼間生地の入りと染出し等に執掌し夜間は意匠図案に没頭せられてゐたが、中途左眼を失明せられ又右眼も近視で座右の物品取扱さへも困難の様子であつたので、刀自は深夜まで傍に侍して何くれとなく便宜を図られた。而して翁は明治初年半衿地仕入の外友仙染業を兼営せられ行商の暇なきに至つたので、刀自の父六蔵君が店員を監督して行商に當ることゝなつた。

明治五年刀自の妹くに子に善太郎君を婿養子に迎へて

行商を担任せしむることゝなり、将来共同事業の複雑となるを慮り、翌明治六年資金を分ちて各独立營業とせられた。折柄明治七年善太郎君卒去せられ、六蔵君の長男源三郎君は未だ十六歳の少年で頼るに由なく、又店員に信賴すべき者もなく、翁は營業の将来を憂慮し六蔵君に暫く行商に出張して店員を監督せらるゝやう懇望せられたけれども、六蔵君は善太郎君を得てから行商を一任し、予てから日野町に物産の尠きを憂へ織機の器械化を思ひ立ち其工作に熱中してゐた場合とて、之を放棄するに忍びず店員と源三郎君に行商を一任せられたが、後果して源三郎君は悪友に交り、姪蕩浪費甚しく将来憂慮に堪へないものがあつた。爾来源三郎君の行動は既述の通りにて、結局落魄窮状に陥られた。これ全く身から出た錆で自業自得と云はねばならぬ。

季弟武三郎君は、六蔵君存命中、兄源三郎君の不良に鑑み、明治十四年母ぬいの生家である蒲生郡中山村岡崎平大夫君が武州青梅町で数百年來酒造業を經營してゐら

れて、日頃同君と昵近の間である同町の綿布問屋平岡久左衛門商店に紹介して入店せしめられたが、六蔵君は武三郎君を分家せしめる目的を以て隣町に家屋一戸を買求め置かれたのを、源三郎君は家計不如意のところから無断で売却消費してしまつた。武三郎君は偶々帰郷して之を知りて心甚穩ならず、中ば自暴自棄に陥り不身持となつたので、明治二十四年解雇せられてしまつた。後親戚なる岡田寿作君の斡旋によつて大阪の呉服問屋稻西商店に勤務せらるゝことゝなつたけれども、既に悪癖浸潤して兎角精勤を欠いたので、同年中解雇せられ止むなく日野町に帰られた。而して母ぬい子は京都細田家の扶養によつて漸く生計を支ふる状態で到底徒食を許されない。又本人には身についた職業もなく、已むなく旧蔵の器具並に自己の所有品等を売却して新に古物商を創められたのであつた。

日野町の旧宅は教室あつて、ぬい子も寂寥を感ぜられ医師尼子信雄に貸室せられていた際、武三郎君は尼子の

娘千代子と想思の仲となり、その間に子女数人の出生があり其内夭折するものあつて経費嵩み収支償はず為に負債の増加となつた。これなどのことから、武三郎君は勞苦煩悶を重ねた結果、明治三十六年遂に神経病に罹り一家の経営不能に陥り家政改革の止むなきに至つた。そこで善兵衛は日野町に出張して親族と協議の上妻千代子を離別して尼子家に帰籍(籍)せしめ、女子二名は養女に遣し、長男金三郎は翁の手に引取りて養育し、母ぬいは病体の武三郎を介抱しつゝ日野町宅に居住し、その経費は翁の援助によつて支弁することゝなつた。曩に善太郎君死去に際し翁は六蔵君に行商の監督を希望せられたけれども六蔵君の納るゝ処とならず、こうした行掛りが因で其後細田家の経営に対し種々献策せられたけれども、六蔵君の採用する所とならず、終に絶家に等しい状態に陥つたことは翁の深く遺憾とせらるゝ処であつた。

翁は安政二年創業以来二十余年千辛万苦寢食を忘れて刻苦經營漸く家業の基礎も安定し将来益々發展の趨勢に

あつたに抱らず、後継者の怠慢と不心得により、一朝にして悲惨の狂態を陥つたことは惜みても尚余りある。翁はこの結果に關し屢々其不満を刀自に洩されたが、刀自は此間に処して其度毎に之を詫びて翁の心を和らげるとに心掛け、又母堂に対してはこれを慰めて能く孝貞を全ふせられたことは、我等のこれを実際に見て誠に感激に堪へない所である。次女でい子は隠居宅に於て能く父母の慰藉と介抱に努められ、明治三十八年翁の歿後は専ら刀自に孝養を尽されたが、同三十九年武三郎君の死去により母ぬい子を隠居宅に引取り最後の孝養を捧げられたが、同年十一月遂に八十一歳の高齡で死去せられた。

刀自の母ぬい子は岡崎家の富有なる家庭の裡に人となり、細田家に嫁せられてより、家政改革のため備中国矢掛町に移住し、後翁の細田家再興の業成るに及び、日野町に帰り暫くは殷盛幸福に日を送られたが、計らずも養子善太郎次女くに子の急逝するの不幸に遭ひ、夫六蔵君の歿後相続者源三郎君の放蕩並に武三郎君の家庭不如意

より遂に発病せらるゝに至り、其間困苦煩悶に日を送られたことは実に同情に堪へざるものがあつた。然し刀自の孝養に慰撫せられつゝあつたが晩年刀自と同棲して温き扶養を受け心から満足せられてゐたが、幾許もなく逝去せられたことは遺憾の極みであつた。然し最後は何等の煩慮もなく、終始満悦の裡に大往生を遂げられたことは刀自孝養至誠の顯れであると云つてよからう。

明治四十五年刀自は古稀の齡に達せられたので、児孫等二十余名、別家者数名が相謀つて祝賀の宴を開いたが、刀自はその席に列して祝辭を受け席上百余名に記念品を与へ、更に大正六年喜寿の齡を重ねられた時は一族三十余名別家者十余名店員百六十余名に増加し、一層盛大なる祝賀式を挙ぐるに至つたことは私等の欣幸に耐へない所である。爾来一家和合益々繁昌して各子弟等は刀自に孝養を尽したので、刀自は歡喜の裡に余生を送られてゐたが、大正九年五月僅か数日の病褥で七十八歳を一期として眠るが如く大往生を遂げられたのである。古語

に積善の家に余慶ありと。我家幸にしてこの金言を實現  
 することを得た。これ皆先考の努力と先妣内助の賜であ  
 つて洵に感謝に堪へなる所である。実に刀自こそは良妻  
 賢母の亀鑑であり、家庭を守り立てた効績者として永く  
 子孫に伝へんと欲するものである。

刀自の祝賀に際し私の捧呈せし拙詠をしるす

古稀の賀に

稀といふよはひ重ねてたらちねの母はいよ／＼すくよ  
 かにして

喜寿の賀に

色かへぬ千とせの松にたくひてやいや榮えなむ宿の母

そは

一雲翁貞雲媪年表 但一雲ヲ中心ニ記ス

年号 一雲齡 貞雲齡

天保 五 一 三月二十一日雲生ル幼名

安政 元 二十一 十二 十月四国八十八ヶ所靈場

善吉ト称ス

天保 十二

父勘左衛門長男祐五郎死

亡ニヨリ園田惣左衛門三

男六歳ヲ養子ニ迎へ岡崎

敬長三女ぬい子ヲ妻ニ娶

ル

十四 十 一 十一月二十四日六歳長女

貞雲(みつ子)生ル

弘化 三 十三 四 備中国矢掛町支店ニ赴キ

質商ニ従事ス

嘉永 二 十六 七 二月十三日父死亡ニヨリ

六歳相統父業ヲ繼承ス

三 十七 八 六歳家政整理ノタメ日野

町宅ヲ閉鎖シテ養母並ニ

妻子ヲ携帯シテ矢掛町ニ

移住ス

安政

二	二十二	十三	正月美濃地方ニ小間物行商ヲ始メ後半杓商ニ転ス	九月十日母よの矢掛町ニテ死去同町大善寺ニ葬ル	九月十六日六蔵次女くに子生ル	四月高村ヲ辞シ日野町ニ帰ル、六蔵矢掛町支店賃業ヲ廃シ日野町ニ復帰シテ半杓行商ニ共同シテ伊勢尾張ニ販路ヲ拡張ス	六蔵長女みつ子ト結婚シ名ヲ善兵衛ト改ム、六蔵長男源三郎生ル
四	二十四	十五	九月十日母よの矢掛町ニ	九月十六日六蔵次女くに子生ル	四月高村ヲ辞シ日野町ニ	四月高村ヲ辞シ日野町ニ	四月高村ヲ辞シ日野町ニ
五	二十五	十六	四月高村ヲ辞シ日野町ニ	四月高村ヲ辞シ日野町ニ	四月高村ヲ辞シ日野町ニ	四月高村ヲ辞シ日野町ニ	四月高村ヲ辞シ日野町ニ
六	二十六	十七	六月蔵長女みつ子ト結婚シ名ヲ善兵衛ト改ム、六蔵長男源三郎生ル	六月蔵長女みつ子ト結婚シ名ヲ善兵衛ト改ム、六蔵長男源三郎生ル	六月蔵長女みつ子ト結婚シ名ヲ善兵衛ト改ム、六蔵長男源三郎生ル	六月蔵長女みつ子ト結婚シ名ヲ善兵衛ト改ム、六蔵長男源三郎生ル	六月蔵長女みつ子ト結婚シ名ヲ善兵衛ト改ム、六蔵長男源三郎生ル
二	二十九	二十	二月二十三日長男勝治郎生ル	二月二十三日長男勝治郎生ル	二月二十三日長男勝治郎生ル	二月二十三日長男勝治郎生ル	二月二十三日長男勝治郎生ル
三	三十	二十一	日野町宅隣接地ニ一棟ヲ新築シテ分家ス	日野町宅隣接地ニ一棟ヲ新築シテ分家ス	日野町宅隣接地ニ一棟ヲ新築シテ分家ス	日野町宅隣接地ニ一棟ヲ新築シテ分家ス	日野町宅隣接地ニ一棟ヲ新築シテ分家ス
元	三十一	二十三	七月京都蛤御門ノ兵燹ニヨリ旅宿類焼ノタメ中井家別荘ニ避難ス、十二月五日長女いと子生ル	七月京都蛤御門ノ兵燹ニヨリ旅宿類焼ノタメ中井家別荘ニ避難ス、十二月五日長女いと子生ル	七月京都蛤御門ノ兵燹ニヨリ旅宿類焼ノタメ中井家別荘ニ避難ス、十二月五日長女いと子生ル	七月京都蛤御門ノ兵燹ニヨリ旅宿類焼ノタメ中井家別荘ニ避難ス、十二月五日長女いと子生ル	七月京都蛤御門ノ兵燹ニヨリ旅宿類焼ノタメ中井家別荘ニ避難ス、十二月五日長女いと子生ル
二	三十三	二十四	十月京都御幸町四条下ル所ニ妻及長男女携帯移住ス	十月京都御幸町四条下ル所ニ妻及長男女携帯移住ス	十月京都御幸町四条下ル所ニ妻及長男女携帯移住ス	十月京都御幸町四条下ル所ニ妻及長男女携帯移住ス	十月京都御幸町四条下ル所ニ妻及長男女携帯移住ス
三	三十四	二十五	四月三日長男勝治郎死去ス、八月十四日次男儀三郎生ル、十月高倉御池下ル所ニ転宅ス	四月三日長男勝治郎死去ス、八月十四日次男儀三郎生ル、十月高倉御池下ル所ニ転宅ス	四月三日長男勝治郎死去ス、八月十四日次男儀三郎生ル、十月高倉御池下ル所ニ転宅ス	四月三日長男勝治郎死去ス、八月十四日次男儀三郎生ル、十月高倉御池下ル所ニ転宅ス	四月三日長男勝治郎死去ス、八月十四日次男儀三郎生ル、十月高倉御池下ル所ニ転宅ス

明治 元 三十五 二十六 二月二十八日六蔵次男武

三郎生ル、貨幣制度ノ変

革ニヨリ旧債ヲ正貨ヲ以

テ一時ニ償却ス

明治 二 三十六 二十七 重症ナル胃病発リ禅学ノ

体得ニヨリ回復ス

三 三十七 二十八 二月十五日次女てい子生

ル

四 三十八 二十九 京都ニ於テ友仙呉服商ヲ

創ム

五 三十九 三十 高村孫兵衛弟善太郎ヲ六

蔵次女クに子婿養子ニ迎

ヘ半衿地行商ヲ近江伊賀

大和ニ拡張ス

六 四十 三十一 江州京都細田両家間ニ資

金ヲ分割シテ各独立営業

トス、六月九日三男永輔

明治 七 四十一 三十二 生ル、九月七日善太郎長  
男善三郎生ル

一月富小路御池上ル所ニ

家屋買得移転ス、二月六

蔵次女クに子、九月同養

子善太郎死去ス、華主ノ

招待ニヨリ東京ヲ觀光ス

藍染業ノ失敗ニヨリ多額

ノ損失ヲ蒙リ家政ヲ改革

ス、六蔵還暦ニ当リ退隠

シテ長男源三郎相続ス、

善太郎ノ死去ニヨリ営業

ヲ縮少シテ近江伊賀大和

ノ顧客ヲ立入伊兵衛ニ讓

渡ス

十四 四十八 三十九 十二月十七日六蔵死去ス

十七 五十一 四十二 三月儀三郎東京半衿地調

查ノタメ出張ス、七月長

女いと子婿養子村西善之

助ト結婚ス、九月善之助

儀三郎兩人東京横浜ニ出

張半衿地販売始ム、甥善

三郎江州ヨリ京都細田家

ニ引取教養ス

明治十八 五十二 四十三 一月十七日三女つね子生

ル

十九 五十三 四十四 五月東京日本橋区葺屋町

ニ支店ヲ設置ス、山脇作

五郎ト大阪府嶋下郡鳥飼

村ニ田畑ヲ共同買得ス

二十 五十四 四十五 山脇作五郎ト共同シテ刺

繡品輸出業ヲ開始ス

二十一 五十五 四十六 山脇作五郎ト不和ヲ生シ

田畑経営並ニ刺繡品輸出

ノ共同事業ヲ細田家ニ負

担ス

明治二十二 五十六 四十七 五月善之助東京ニ於テ発

病シ帰宅療養ス、儀三郎

東京ニ出張経営ニ当ル、

十一月二日四男孝三郎生

ル

二十三 五十七 四十八 一月東京支店ヲ日本橋区

久松町ニ移転ス

二十四 五十八 四十九 二月退隠シテ名を善輔ト

改メ一雲ト号ス、押小路

富小路東入所ニ家屋ヲ買

得別居ス、儀三郎相統善

兵衛ヲ襲名ス、五月藤井

たか子ヲ妻ニ娶ル、九月

善之助家族ト共ニ東京日

本橋区田所ニ移住シ独立



営業ヲ始ム

明治二十五 五十九 五十 一雲和歌ヲ須川信行、赤

松祐以両大人ニ就キ練習

明治三十三 六十七 五十八

三月善三郎高倉押小路上

ヲ始ム、四月二十一日善

ル所ニ分家シテ今井千代

兵衛長女ひさ子生ル

子ヲ妻ニ娶ル

二十六 六十 五十一

三十五 六十九 六十

十一月十三日善兵衛長男

四月関西部ヲ設ケ永輔主

真治郎生ル

任トナリ京都大阪ニ販売

二十七 六十一 五十二

三十六 七十 六十一

七月日清開戦ニヨリ軍資

二月日露開戦ニヨリ一雲

金ヲ献納シ一雲還曆祝ヲ

古稀貞雲還曆ヲ延期ス、

延期ス

京都本店拡張ノタメ南北

二十八 六十二 五十三

隣接地ヲ買得ス

五月善兵衛、永輔、善三

郎ト共同営業ヲ制定ス

五月横浜市ニ出張店ヲ設

二十九 六十三 五十四

三十七 七十一 六十二

日清平和克復ニヨリ一雲

ク、隠居宅ニ土蔵新築竣

還曆和歌賀筵ヲ開ク

工ス、十一月一雲発病シ

三十 六十四 五十五

東京支店増築ノタメ一雲

不治ヲ予感セララル

三十一 六十五 五十六

三十八 七十二 六十三

五月永輔押小路御幸町西

四月四日早暁一雲死期ノ

出張工事ヲ監督ス

年	事	元	事
明治三十九	八月五日六蔵次男武三郎死去ス、九月貞雲母ぬい子ヲ江州ヨリ隠居ニ迎ヘ扶持孝養セラル、十一月二十七日ぬい子死去	三	七十二 六月善兵衛富小路押小路上ル所ニ新築竣工移転ス
四十二	八月名古屋市ニ出張店ヲ設ケ孝三郎主任トナル、高倉御池上ル所ニ地所ヲ買取シ友仙工場ヲ開設ス	四	七十三 二月善兵衛控家新築竣工 シ貞雲てい子移住ス、二月又吉東京芝区伊皿子町ニ家族ト共ニ移住ス、十一月本店創設五十年記念土蔵新築ス
四十三	五月細田合名社会ヲ創立ス	五	七十四 十月永輔富小路御池下ル所ニ新築竣工移転ス
四十四	一月東京田所町支店新築竣工移転ス、十一月京都本店新築落成ス	六	七十五 二月孝三郎押小路富小路西入所ニ分家ス
			六十四 八月五日六蔵次男武三郎死去ス、九月貞雲母ぬい子ヲ江州ヨリ隠居ニ迎ヘ扶持孝養セラル、十一月二十七日ぬい子死去
			六十九 一月東京田所町支店新築竣工移転ス、十一月京都本店新築落成ス
			七十一 孝三郎合名会社ヲ退キ独立輸出入業ヲ始ム、七月善三郎麩屋町二条下ル所ニ新築竣工移転ス
			七十二 六月善兵衛富小路押小路上ル所ニ新築竣工移転ス
			七十三 二月善兵衛控家新築竣工シ貞雲てい子移住ス、二月又吉東京芝区伊皿子町ニ家族ト共ニ移住ス、十一月本店創設五十年記念土蔵新築ス
			七十四 十月永輔富小路御池下ル所ニ新築竣工移転ス
			七十五 二月孝三郎押小路富小路西入所ニ分家ス
			元 貞雲古稀祝賀ヲ開ク
			二 立輪出入業ヲ始ム、七月
			三 善三郎麩屋町二条下ル所ニ新築竣工移転ス
			四 二月善兵衛控家新築竣工シ貞雲てい子移住ス、二月又吉東京芝区伊皿子町ニ家族ト共ニ移住ス、十一月本店創設五十年記念土蔵新築ス
			五 十月永輔富小路御池下ル所ニ新築竣工移転ス
			六 二月孝三郎押小路富小路西入所ニ分家ス

七 七十六 九月孝三郎大阪市東区南

久太郎町ニ移転ス、十二月六日妻つね子東京宅ニ於テ死去

大正 八 七十七 貞雲喜寿祝賀ヲ開催ス

九 七十八 五月十五日善兵衛妻たか子死去、同月二十九日貞雲急性脳溢血ニヨリ死去

### 跋

私は善輔翁の三男に生れたが、長男の早逝によつて次男善兵衛兄が家督を相続せられたので、私は次男に昇格したこゝなる。私の幼少の頃は所謂末子（おとこ）として両親には可なり可愛がられ、兄弟の間にも羨まれてゐた。然し十二年後には妹が生れ、続いて弟が生れ私の末子の資格は消滅した訳である。家兄は記録に忠実且強記で今回先考一雲翁伝記補遺を編纂して父の事歴を明ら

かにせられその跋文をものせよと命ぜられた。私の光榮之に過ぐるものないが悲しいかな私には何等の記録もなく、亦文章の素養もない。只私の記憶に残っている事柄の二三を述べさせて貰つて其責を塞ぐこととする。

私の五六歳位の時母に伴はれて何れへか出かけるべく新調の衣服を着せられ新しき下駄をはき、庭に立つて嬉々としてゐる姿を見て父は茲へ来て見せよと云はれた。

私は直に下駄を脱ぎ父の前に立つた。父は新しい衣服や下駄を見せよと云つたのであるから、下駄のまゝ床に上つても決して叱りはしないと云はれた。あゝ何と云ふ慈愛の籠つた言葉であらうか。私等少年の頃小店員（その頃は丁稚と称へた）は大低十一二歳で奉公に出たもので、田舎より一躍都会に出たことゝ心淋しく、夜間にもなればシク／＼と泣き出すものもあつた。其時には私に命せられて新京極あたりへ連れ出し慰めたりした事もあつた。父は店員に対する食物は非常に緩やかであつた。自分一人が料理屋で払ふ費用を以て多くの店員に満

足を与へ得ると云ふ主義を實行せられ期節くんに応じて富豊に之を造り、さて皆の者氣張つて食へよと云ふ調子で間食などもよく行届いたものであつた。之等は母の配慮によることは勿論である。

私は七八歳のころ人並に小学校へ入学せしめられたが、或日先生に叱られた。その事柄が私の過ちでないと思ひ不平でたまらなかつたが、弁解は出来ない。そのため学校が嫌になつた。両親に如何程叱られても諭されても終にはそれを言はれると腹が痛んでくる。両親も終に断念して爾来家庭で読書算術習字等を教へられた。然るに私の十二歳の時義務教育制が布かれ、どうしても学校へ這入ねばならぬことゝなつた。私も據なく学校に這入つたが、七八歳の小供と私とは二三歳も違つて居り一所にされては一寸困つた。其時先生の好意により、初等二級に編入せられ、爾来半ケ年間に初等二級一級を連続的に初等科を卒業し、次の半ケ年間に中等六級五級を修了して四級に編入せられ漸く一ケ年を短縮せしめられたが、

義務教育は初等科のみであつたから、二三月後退校して専ら營業及び家庭の事を手伝ふことゝなつた。父の教育は中々厳格であつた。私は丁稚同様の扱ひを受け起居は素より掃除風呂焚炊事何んでも一通りはやらされた。食事も庭で腰掛で食するので、その凡てが丁稚に対するよりも一段と厳しいやうに感ぜられた。そこで私は父に「どうか奉公に出して下さい」と哀願した。其時父の言は「この店にも数人の丁稚が居るが何れも父兄より託されたもので余り厳格に過ぎるならば逃げて帰るものが出来るかも知れない、お前は此家に生れたものであるから如何様に厳しくしても逃げ出す心配がないから、吾の理想通りに教育するのである」と。こゝらが一般の親達の心持ちと父の考と違ふ所である。

父は食物の好き嫌ひに対しては兎ても厳しかつた。若し嫌ひとでも言つたならば、口の中へねぢ込まんばかりにせられた。私は斯様なことを考へたことがある。『若

し鰻が嫌ひだと言つたなら定めし沢山喰して貰へるだらう」と。そのおかげで私は何にも嫌ひなものがない。或知人は「君は乞食腹だ」と。或は乞食腹かも知れないが、嫌ひなものゝないと言ふことは誠に愉快で幸福である。或時一人の丁稚を入店せしめた時、本人の父の曰く「此者はどうしても漬物を喰べませぬ、色々と苦心をして無理に喰べさすと嘔吐を催すと云ふ有様ですから御許しを願ひたい、たゞし漬物を喰べないと云つて代りものを給せられるやうなことは下さらぬやう」とのことであつたから、暫く放任して置き半年ばかり後に見たら其小供はしきりに漬物を喰つてゐる。原因は何もない只喰つて見たら喰べられたのである。宅に居つた時と奉公に出たときと心境が代つて来るのである。矢張食物の好嫌は気儘より来ることが立証された訳である。

父は営業のこと、殊に技術上に就ては想像も及ばぬ熱心さであつた。染物の型則ち模様の製作は悉く自ら筆を執つて描かれ、画工の手によつて作られたものも更に筆

を加へ、繁を省き足らざるを補ひ、一輪の花、一枚の葉の配置にも決して無駄がなかつた。専心作図に耽けられつゝある時隣室で小音でも発すると飛び上る程驚かれた。全く心身を作図に打込み無私の境に入つて居られた証拠である。又織物に対しても組織的に研究を重ね、縮緬の緯糸二本づゝを以て槍垣状の皺を顕すべきもので少しでもそれが乱れて居れば不合格とせられ、絹縮みの堅皺が乱れてゐるからとて、自ら皺寄機械を發明し、半衿地専用の湯熨斗釜を工風し、衿裁器を作り、衿丈け筋付器を考案せらるゝ等、これ等は何れも退隱後の仕事であつて、父の老後は和歌を楽しみ悠々自適と云ふやうな暢気な生活ではなく終世事業の改善に努力し我々を指導鞭撻せられたのであつた。

父は常に我々を訓誡せられた。「凡て商工業者は自己利益のために働くにあらず、国家のために働くのである。我々製造販売に従事する者は、如何にすれば需用者に満足を与へ得べきや、如何にせば邦家に尽し得べきや

を考へるのである。利益は自ら求むるものにあらず、天より与へらるゝものなり。暴利を貪るが如きは以ての外である」と。此信念が自然製品の上に現はれ、華主の信用を博したことも宜なりと思はるゝのである、嘗て某華主の仕入方が来訪して「何か安いものはないかと」と云はれし時に父は色をなして「店には安いものも高いものもない。努力に対する報酬だけは当然要求するのである」と。又電話が追々普及され我店にても其必要を感じ許しを乞ひたるに對し「電話があれば華主より注文のあつた場合持参しなければならぬ。電話がなければ先方から取りに来られる。電話がなければ出来ぬやうな商業なれば止めて仕舞へ」と。又常に製品に専念して良品を造れば、売方は丁稚にて沢山だと。この信念は商道の真体として髓に学ぶべき処である。

父の勤儉力行は最も徹底したものである。父は蒲柳の質として毎朝跣足で庭内を散歩しつゝも、紙屑糸切が落ちて居れば拾ひ集め一本の古釘一枚の反古紙も決して無

駄にせなかつた。或時東京店の修繕に當つて屋内に面した土蔵の黒壁の禿げた所に古新聞紙を張り墨を塗りて更に其上に漆汁を塗つて一時を凌ぎ、又店舗の新築に當つては、作事方の居ない時に自ら古竹を以て下地を編み壁土を付ると云ふ風であつた、それであつて慈善事業は常に怠らなかつた。神社仏閣の寄進は勿論親族縁家を救済せられたことも又相当多数に達している。

又母はこの厳格なる夫に仕へ、内助の功績は洵に顕著なものがあつた。我々子女に對し、又店員に對し常に父との中間にあつてよく調和を計られ、而も父に對し一回として反抗的言辞を出されたことは見なかつた。家庭の仕事に相当多忙を極められつゝ中に營業の方の仕事も助けられた。彼の塚本合名会社は毎年相当數量の婦人紋付裾模様着尺の悉皆を託される例であつた。母は生地裁ち合せに周到なる注意を払ひ、為に予定より若干數量を余分に造り出すことが出来た。一般の悉皆業者はそれを自己の余徳としたものであるが、正直一遍の父は其全部を

納付し決して胡魔化す如き行為がなかつた。母は又模様画付万端の仕事を忠実にせられた。この誠実なる行為は特に店の信用を高め、我店が半衿業に移り着尺地製造を廃したにも拘はらず、これだけは引受けて呉れよと猶数年間継続された。くけ紐製造を始むれば母は自ら仕立の見本を造り、一族の婦女子をして製作せしめ、又絞りものを始むれば自ら縫締をなす等、常に陣頭に立つて活動せられたことは儘に主婦の模範とすべきである。

家兄善兵衛氏は、父の指導と監督はあつたと云へ十八歳にして東京に出で単身半衿界の実状を視察し、二十五歳にして営業を継承し、殊に私の如き我儘者を克く導き共同営業を続け今日の大を成すに至つた事は、一は父の教訓を其儘受継ぎ真面目に他の一切を顧みず、専心身を抛けうち献身的努力をされたる結晶である。私はその余光によつて漸く一ケ年余の初等教育より受けなかつた身を以てその驥尾に付し、家兄が満五十歳に達せらるゝや営業の実権を託され、更に株式会社創立に當つて

は、社長の要職を与へられ、猶其間関係組合の組長、商工業会議所議員其他各種の名譽職にまで挙げられ、幸に大過なく各其任を全ふし得た事は、一に父の厳格なる教育、母の慈愛籠れる撫育、家兄の適切なる指導の賜に外ならぬ事を思ひ、常に感謝してゐるのである、聊か私の記憶の一端を述べて跋文に代へた次第である。

弟 細田永輔述